

麻 生 路 郎 主 宰

川柳雜誌

九 月 號



東 京 句 會

本社十週年記念事業の一

川柳の社會化を主唱して茲に十星霜。その機關誌「川柳雜誌」は全日本は勿論遠く海外にまで羽翼を延ばして光輝燦然たるものがあります。

我が社は斯かる歴史を一層意義あらしめんがために關東川柳家の應援の下に本社東京句會を開催する事にいたしました。全國川柳家諸賢の奮つて參加せられんことを切望いたします。

日時 十月十五日(日) 自午後五時至九時半

會場 東京市淺草雷門前 並木俱樂部
兼題 「大空」 三句 麻生路郎選

締切十月十日着用紙官製はがき住所氏名明記
投吟所 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地 麻生路郎宛
▼出席不能の方は加題と共に小寫書又二錢切手で五拾錢同封されは入選句官品及び此の句會報掲載送ります。

會費 金七十錢

路郎賞 兼題三光天の句に路郎賞、拾圓(債券)を贈呈
題三光の地、人位句及席

記念品

路郎筆記念手拭 一本宛
「川柳雜誌」合本(金二圓半) 一冊宛
以上二點出席者に限り贈呈
句會發表誌(金三圓) 一冊宛

講演・席題・選者・記念撮影等々々具體的な句會順序は追つて發表いたします。

贊助御芳名 (次書不可)

川上三太郎	前田 雀郎	八十島杜若	藤島 茶六	川柳 雨吉	高島玉夷朗
塚越 迷亭	村田 周魚	渡邊桃太郎	田中 空壺	寺井紅太郎	宮尾しげを
品川 陣居	關口 文象	中野 懷窓	中島 鐘美	武田 玄六	齊藤丹三郎
森田 久	野本 昭四	松田 青風	岡本 嘘夢	村澤 小萩	椎名 愚佛
道柳しん平	磯部天邪鬼	高木角戀坊	石島吐月峰	山田阿々子	野村無名庵
田中金一郎	石谷まさる	竹田花川洞	岡田三面子	西島 〇丸	伊藤 瑤天
井上 信子	落合六文錢	武田杵太郎	線谷摩耶火	二條 一郷	(以下次號)

主 催 川 柳 雜 誌 社

洋飲食店の繁榮機關

麻生幸二郎主筆

喫茶新聞

喫茶店・酒場・カフェー・食堂・フルーツパーラー等の繁榮機關として刊行し、頗る近代的な編輯振りと興味横溢せる記事の満載とは本紙の特色なり。敢て御購讀を薦む。

大阪市西成區玉出本通三丁目三六

發行所 喫茶新聞社

電話 天下茶屋二五七九番
振替口座大阪三〇三九二番

毎月一回五日發行
定價部金五錢
ケー年金十六錢郵税共

懸賞川柳
を募る

課題及投句規定
等に就ては別欄
廣告參照の事



川柳雜誌第十卷第九號目次

五七五の翻譯

麻生路郎(六)

ペンは叫ぶ

不朽洞主人(四)

東京句會前記
誹風柳多留全集(上)

武玉川初篇研究(十六)

梅本秋の屋
森東魚(三)
蛭子省二

肱枕草紙(九)

梅本塵山(五)

雜

磯谷を偲ぶ

安川久流美(三九)

雜記帳

松丘町二(三三)

床几山無駄話

廣江天痴人(三〇)

僕たち

澄田羅門(三〇)

秋

人間は

辻いの助(三)

川柳パイロット欄

福田山雨樓(四)



柳壇畫報

(四)

不朽洞句稿

麻生路郎選(三)

川柳塔

麻生路郎選(三)

近作柳樽

麻生路郎選(三)

粒々集

(四)

日本名所名物川柳 大阪之卷「四天王寺」

麻生路郎選(三)

牛

中澤濁水選(四)

燈明

尼絲之助選(四)

櫛

西田華水共選(四)

一路集

本社八月例會

山雨樓記(五)

續川柳家入籍調

山雨樓(四)

西之町MEMO

綠雨(四)

編輯の窓

路耶・山雨樓(六七)

題字

麻生路耶

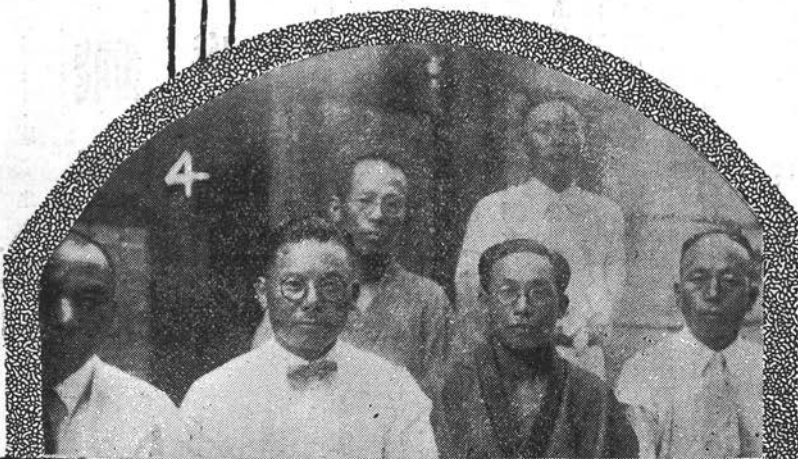
表紙「桃太郎」(切紙細工)

麻生路耶



柳・壇・畫・報

(日二月八年三三九一)君高三島三人伴の戸神は右のそ。君爾線本價務總社来るて立に上京山立スプラア北 (1)
氏美流久川安員客社本がのたけつを符央中・催開て於に起三澤金月八年三三九一。會覽展覧畫柳川氏美流久 (2)



樂神・雄雨山・敬應・人境・丁吉・郡太三・達文半・府水・郡路・郡水らから右てつ向列前 會議御念忌年五壯時しむきた (3)
 文・三町・鬼無・太紀・平素・月素・即・人縣・一興詩・歩一・足跡・昭録・浦六・治應罪・迷爾・重百・柳汀・郎司 列後
 ーイゲンヤキ永森夜日一廿月四年三三九一 兆迷・英やあ・一昌・次郎・子柳白・藤鶴・虎悲・酒十一・らき少・占比・横
 年三三九一) 君謹の水泊波阿・紫羅田羅りよ右列後・月山村西・泉松村岡・種置田竹・雨録本領りよ右列前 のひ集の居録置 (4)
 (日十二月八



五七五の翻譯

麻生路郎

九月の「改造」紙上に杉村楚人冠氏が「反翻譯か反逆か」と題して翻譯の絶對不可能論を稱へられてゐる。

先づ、氏はシカゴのロータリー・インタナショナル本部からロータリー・クラブの會憲の翻譯を頼まれたことがあるが、英文を日本文に翻譯するといふことは、英文が讀めないか、日本文が書けないかでなければ出来るものでないと思つてゐる私は、兎角の押問答の末斷つたと述べてゐられる。又

なるほど原文の大體の意味ぐらゐは、どこの國の言葉でこの國の言葉に譯しよう、それは容易に出来ることかも知れぬ。けれども意味といふばかりでなく、その調子、力、趣味、深さ、廣さ等、等まで忠實に一分一厘も違へずに譯文に傳へようとするになると、それは到底人間の力で出来ることでない。

その出来ない理由は極めて明かである。國々によつてそれ／＼讀者の感受性が皆違ふからである。

國語といふものは、或る一國民が、國民としては祖先より代々、一個人としては生れ落ちてから死ぬ時まで、使ひどほしに使つてゐる間に、口でも筆でも説明することの出来ない意味、意味のニュアンス、調子、趣味、強さ、深さ等が出てくるものであつて、それを味ひ得ることは、その國語を使ふ國民自身か、又はその國語によく精通した外國人かのみが享受し得る一種の特權である。これを他の外國語に寫したところが、都合よく寫りもしまいし、假に寫し得たところがこれを味ひ得る人はその外國にあるべき筈がない。と述べて更に

元來言葉といふものは、その言葉の形なり音なりがかはりさへすれば、必ずその意味がかわる。意味とまではいはれな

くとも、少くとも意味のニュアンスはかはる。音が違ひながら、それに盛られた意味又は意味合の全然相同じいといふ事は決して有り得ない。世に *Synonym* (異語同義) といふ言葉はあるがそれは極めて大まかな意味で同義を認めたまでのことで、絶対に同義の異語なんといふものは存在し得ない。

「女」と、「婦人」と、「女子」と、「婦女子」と、「女人」と、「女性」と、「女姓」と、いづれも皆、女の事である點から同義といへば同義であるが、これが全部寸分の相違もない同義のものだとは誰が言ひ得やう」と尺で計つたやうに嚴密な斷案を下してゐられる。

氏は最後に誤解だらけの翻譯者が原文に對する反逆の徒である事はいふにも及ばぬ事であるが、如何に忠實に刻銘に一字一句もおろそかにせずして、翻譯をして見たところが、結局はやはり反逆者たるに過ぎない。この故に翻譯家に必要なものは語學の智識でもない、文字の才でもない、たゞ手頃の辭書と鈍き良心とあれば足るといつた人がある。つまり翻譯といふは多くの場合葉度胸の產物である。といつて翻譯といふことには全く匙を投げてゐられる。

二

私はこの一文を読んで考へさうれた。なるほど楚人冠氏の說かれるが如き嚴密さに於ては翻譯といふことはたしかに不

可能に違ひないが、しかし、それにしては遠き過去から現在に至るまでに、如何に多くの翻譯が行はれて來たかといふことである。單に英文を日本語に翻譯するばかりでなく、支那語を日本語に翻譯し、世界のあらゆる國語を日本語に翻譯して來て、何人も、その完全さを信じぬまでも、兎にも角にもそれによつて、異國文化の吸收につとめ、且つ相當の成績を擧げてゐることである。

おそらく、楚人冠氏も、氏の説くが如き翻譯不可能なるが故に、翻譯必要論を稱へてゐられるのではあるまいと思ふが、若しさうだとすれば藝術を文字によつて表現することは自國語といへども不可能であるから、文字による藝術の表現を絶対に排斥してゐるのと等しくて、所謂机上論の面白さに過ぎないことになつて終ふ。理論はさうであるが、私たちも川柳の評釋をする場合には、嚴密に／＼といふ考に囚はれて楚人冠氏が翻譯を謝絶されたやうな點まで押し／＼めて行くことが多い。川柳の評釋を求められた場合に説明に過ぐれば原句の味を失ふばかりでなく類型的或は類想的な句の評釋となつてしまふし、説明不足であれば對手方が充分にうなづき得ない結果を生ずるので、そんな時には、まあ眞の味が判るまで幾年でも繰返して味讀して貰ひたいと云ひ切つてしまふことにして來たが、これなどは全く、楚人冠氏の翻譯不可能論を同じ日本語に於てすら、出來ないものとして扱つて來た

ことにもなる。

私が考へさうとしたといふのは上述の如き理論と實際の矛盾を感じたからである。理論に於ても煮じつめた翻譯の實際問題についても私たちは明らかに不可能なることを信じてゐながら、なほ且つ楚人冠氏の云はれる反逆的な翻譯を繰返してしかも、そのものからある程度の満足を買うとしてつとめてゐる矛盾を思はされるのである。

三

楚人冠氏は英文を日本語に翻譯することの到底人間業にあらざることを力説され、八月の「文藝春秋」で發句翻譯の可能性を疑つた小宮豊隆氏のこと言及されてゐるが、ひとり發句に限らず、短歌に於ても嚴密なる翻譯の不可能なことは云ふまでもない。まして川柳の如き特異な味、調子、趣、深さ、強さ、句語による約束等々の短詩に至つては容易にその翻譯の可能性を信じることは出来ないと思つてゐる。大體發句の翻譯せられたことは過去に於てその例尠なしとしないのであるが、それ等は何れも問題視せられずに看過されてしまつた。

例へば一九二一年にジョン・パリスの著はした KIMONO の

第一章の劈頭に、加賀の千代女の句だと云はれ、又さうでないといふ云はれてゐる「澁かるか知らねど柿のはつ契り」の句が左の如く英譯されてゐる。

Shibukaro ka Whether the fruit be bitter,

Shiranedo kaki no Or whether it be sweet,

Hatsu-chigiri. The first bite tells.

この KIMONO の各章が必ず日本の詩歌俳句俗謡等の英譯ではじめられてゐるが、それ等の翻譯が單に興味本位に過ぎなくて、眞に適譯であるとうなづき得ないのは自分が語學の才に乏しいからばかりではあるまい。著者ジョン・パリスは是等の歌の出所を扉の頁で A. Waley の "JAPANESE POETRY: 'THEUTAN' (Clarendon Press) から採用したものだといつてゐるが、私はワレイの「日本の詩歌」といふ本を未だ手にしたことがないので、その本の全貌がどんなものであるかを知り得ないが、ジョン・パリスの採擇したものを見ればその一半を想像し得られるやうな氣がする。兎に角、推奨に價するものではないが、大正十三年の十一月に出た成見延龜氏と上床新助氏の共著 SENRYU (Short witty odes)「英譯川柳名句選」などから見ればまだ、優れた翻譯だと思はれる。しかしながら右に例示した千代女の句でも、柿を fruit と譯した

AN ANTHOLOGY OF HAIKU

ANCIENT AND MODERN

のでは溢るかゝ利かぬので日本人の我等には物足らぬ。はつちぎりにしても、あのもちりが全然出てゐないし、（もちりは詰らないものだ）なんと云つてもこの程度の翻譯では楚人冠氏の反譯か反逆かに終つてしまふことは誰人も否定し得ないであらう。

確かアメリカ版の小泉八雲全集の中にも蕪村などの俳句を紹介してあつたと記憶してゐるが、何れも似て非なる翻譯である事は疑ふべくもない。近時拙吟の川柳を阪大の笠原博士が獨逸譯されつゝあるが、殆んど近いものに譯せるものと、どうしても翻譯し得えないものがあるとのことである。氏は單なる醫學博士でなく、寧ろ文學に行くべきをあやまつて、醫博になつたと云はれるだけに文學上の造詣が深く、殊に川柳に於ては路生の名によつて既に一家をなして居られるのでその獨逸譯が、かなり優秀な點まで翻譯されてゐることは想像に難くないが、外人が句意について、句語についてどの點まで感受し得られるかは疑なきを得ない。

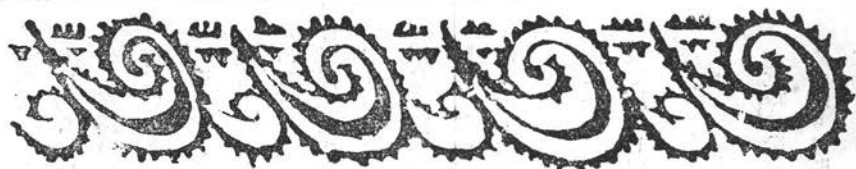
四

近時、發句翻譯問題が盛んに論議せられるに至つたが、この起りは昭和七年十二月二十六日に宮森麻太郎氏が

なる發句の英譯書を刊行されたので、笠原博士は「川柳雜誌」三月號に「川柳の翻譯に就て」を執筆され、川柳の翻譯が俳句のそれよりもなほ一層至難であることを指摘された。

ところが「文藝春秋」の四月號に文學博士井上哲次郎氏が「俳句の特色と英譯の俳句」と題して宮森麻太郎氏の「英譯古今俳句集」の紹介と自己の所感とを述べられたが、その多くは宮森氏の所說の受實的であり提灯持であるに過ぎなくて井上博士自身俳句川柳の如き短詩型に對しては所謂教育者的觀賞眼しか持つてゐられないやうに思はれた。而して該書中に於ける宮森氏の川柳觀、井上氏の川柳觀が全く時代遅れと誤解の甚しきものであることには啞然たらざるを得なかつた。笠原博士は「川柳雜誌」の七月號に「再び川柳の翻譯に就て」を執筆されて、川柳のために氣を吐かれた。

次いで「文藝春秋」の八月號に小宮豐隆氏の「發句翻譯の可能性」となり、「改造」九月號に於ては杉村楚人冠氏の「反譯か反逆か」の一文となつたのである。以下少しく宮森麻太郎氏の「英譯古今俳句集」中にある氏の川柳觀に就て検討して見たい。（續く）



近作柳樽

路郎選

衣紋竹風にくるりと拗ねて見せ
 箸置いた音聞いて待つ不足税
 飲めぬ口なればコツプに齒が當り
 ゴム風船逃がして父もあわてたり
 終點に義足の音で立上り
 街の紳士ベングイン鳥は歩み來る
 テヨツカイをする恰好でボクサアゐる
 バツト級カンカン帽を斜にきる
 ハトロンのごと捨てらるゝ戀もある
 聴きづらい言ひづらい嘘鍔の聴く
 夢を追ふ羊の背に笛ぞ鳴る
 眠られぬ寢莫薩の上に過去の事

大阪

同

同

大 同 同 同 同 路 同 同 同 同 道 同 子

門

生

子



待たされて空虚の瞳ネオンみる
 母ひとり涼みに背き經を讀み
 蚊張越しに見る向日葵は女王めき
 譜を書いてくれと蛙が窓に來た
 打水へ御世辭を云つて通り過ぎ
 馴染にもなれずあの妓の手をみつめ
 信用の無いの同志で判を押し
 首すじの扇子が似合ふお寺はん
 アスハルトもうつぎをあてつぎをあて

七歳の姪の死に

蓮の葉の上はダンスに狭過ぎん
 情痴濃かに青蚊張のゆれ
 文明圏外の荷馬よ荷馬
 一錢屋わが打つ鉦におびへる日
 辛棒が何時まで續くのか貧し
 佛壇に俺だけ見れば一人の灯
 桑の實に幼き頃の味がなし
 蘭の金エロ享樂をゆるせかし

神戸

愛媛

大阪

同

同

長野

同
麥刀子

同

同

同

南
葉

同

同

無
鬼

同

同

同

夜
王

同

同

銀
波

同

有
爲郎

同



寂寥に灯がつき月がのぼるなり
 下駄見ればまだく若い妻の下駄
 どないしたら客が来るかと喫茶店
 鐘撞ききつて緑樹鬱蒼
 工場長 N O 一の社宅に居
 一人になるを被害者淋しがり
 加害者はニュースと別な道をと
 亭主があるとも見えぬ足を組み
 一點の雲の行衛が氣にかゝり
 遅刻しかけてるのに定期拜見
 地下鐵を出るとくつきり虹がた
 戀のため貴女のために休む日よ
 生きる爲着物も少しよごれよう
 出張費儲けた様に餘して來
 賣り切れた煙草へそつてなく歸し
 氣まづさの二人へ苺赤すぎる
 コツプ嚙み割りたい事を女聞き

大	同	今	同	大	名	同	大
阪		治		阪	古		阪
同	勝	同	青	同	月	同	同
二	陽	靜	米	け	茶	わ	人



醫學より一步進んだ病氣なり
 妻にまで虚勢捨て得ぬ淋しさだ
 生活の匂ひ知つてゐるインキつぼ
 冷奴不平の箸につかまらず
 給料日居残る組と歸る組
 風上の社宅は葱が煮えまして
 見送られ出迎へられて老けてゐる
 支店長でなくてよかつたと思ふ
 涙今あふれんとする大寫し
 終點へ吊皮だけがゆれて着き
 手術料わがサラリーをあざわらひ
 いたわられ過ぎてめくらの腹が立ち
 淋しさに窓をのぞけばなほ悲し
 日々の勤を案じ子を案じ
 蔑んで居るとは知らぬ片思ひ
 淫らなる眼とばかり見る未亡人
 まことしやかに醫者脈をとり藥くれ

大版	小松	脾戸	大版	銀川	米子	鳥取	金澤	岡
秋	同	同	同	同	同	同	同	同
光	とし	茂もよ	春	鴉	圓太郎	法泉水	緑水	山茶花



卒業をして先生の愚痴を聴き

戸下温泉にて

水ゆたか旅の疲れの齒を磨き

城山

黒船の昔語りに指して

通過驛思はぬ人が立つてをり

釣りしのぶ二階の縁で米を研ぎ

憧れて都に來ても拭掃除

戯れに戀はすまじの割烹着

詰襟が似合ふタイプで張學良

瞞されたんだわと言つてから二十分

道々の話は二人きりの事

絞られた金が欲しいか馬鹿者よ

煙草すゝめて吐かすつもの刑事なり

失格を恐れてしどもどろなり

キリストに惱みあらはな皺があり

岡野露洲君を悼む

お骨壺君窮屈に眠ります

大阪

同 氷炭

同

同 木圭

同

同 佐津美

同

同 栗

大和熊田

同 翠峰

京都

同 啓秀

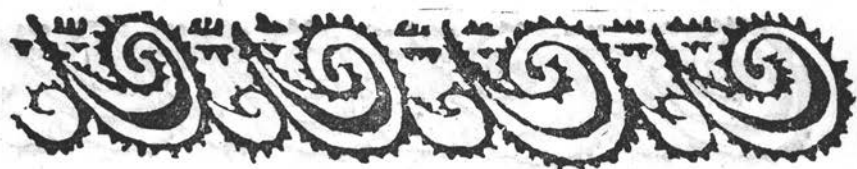
同

同 松雨

桑名池

同 雨

同



蟻よ——そこは下駄の下だよ

寶石にいくめられるあはれさよ

時代から見限らるゝか白ズボン

君の氣まゝを同志また真似

氣合術大聲叱咤五冊賣り

昇給に給仕は筆を洗はされ

斷わりを言ふ女房の厚化粧

ソプラノへわかつた様に手をたゞき

飛び去つた鷗の白き眼にのこり

逢ひにゆく秋のかるき灯のあかさ

アツパツパ手持ち無沙汰に乳を抱き

異彩ある創作君は逝き給ふ

水郷松江に住んで

藻の花は小泉八雲舊居なり

本壘打自分忘れた聲を出し

今日明日と力強くも一步出で

少女の神經をもぎ取つた騒音だ

工場風景

同

大阪

同

同

同

松江

同

同

臺中

松江

大阪

噴兒

同

喜由

同

燕雀

同

九文錢

同

榮二

同

翠句樓

同

祥月

同

巷二

耕朗

磨須雄



箱の底残つた票は點字なり
 バスガール二人になつて打明ける
 番臺がためた誇りのプロマイド
 うぬぼれもせず自畫像を額に入れ
 白靴のステツプ軽いアスファルト
 洗濯の音をきいてる日の日なか
 吾子さへ寄せつけぬ膝へ狎を抱き
 妊娠の妻なり少し無理も聞こ
 すいゝととんぼ仕事の邪魔をする
 病室から一步ゝ他人とはなり行く
 微笑して眞夏の空へ呼びかける
 君死ねば初號活字になると云ふ
 兵隊にもてる女給よく太り
 心臓と二人切りなり秋の夜
 人生のあわたしさを知る車道
 制服の巡查に目付き疑はれ
 ビアノの手止めて避暑地の御選擇

愛媛	大阪	松山	神戸	松江	金澤	鳥根	石川	和歌山	同	同	大阪	同	神戸	同	同	同
孤	詩	一	彌	山	今	青	義	三	一	菊	野	明	吉	迂	元	美
鶴	郎	紫	助	紫	雨	波	子	郎	笑	路	郎	坊	右	均	山	津



地曳網勇ましい程獲れてゐす
 病ゐんへ行つてなみだの天と地と
 現實へ引き戻されし夜の机
 銀行の金庫に夏の陽が亘る
 おくれながらも生きて行くなり
 風ひらり／＼うれしい今日の戀
 ちりめんを見てゐる冷飴の子よ
 人の居る證據電燈つきにけり
 かなかなのどこに行きしぞ雨がふる
 さだめなき命思ひて卵酒飲む
 他人ごとでなく涙する金の事
 一帖の疊がひろく瘦せてゐる
 人道へ車道へ木の葉散つて秋
 大議論！待て灰皿の置き所
 鳥の行方を寝ころんで見てゐるの
 我腕に任務は重し頭數
 鏡臺に乳房がうつる夏の宵

神戶	同	東京	大阪	京都	大阪	同	今治	京都	松江	愛媛	同	同	同	同	同	同	同	同	同
葉郎	英彦	銀雪	朴甫	子鬼	弓磨	新市街	芳岸	波樓	慕秋	一馬	縷紅	巷巴	宵明	砂詩朗	柳生	泊童			



境内で双物屋紙を吹雪にし
 舊友の金ピカおいと云ひ澁ぶり
 花嫁は目元ばかり笑つて
 ハンカチで母出征へ伸び上り

銀行員生活

日附印變るだけなり我が暮し
 書いておくだけですと云ふ契約書
 灰色な暮しが厭で母を捨て
 盃に觸るゝその手のやつれたる
 後家のひがみで男嫌ひだ
 設計に無い事までも頼まれて
 兒が二人あれどダンスもうまい
 あの雲が俺の生命に似て淋し
 俺に似た子を抱いて姿見に立てり
 歸る歸さぬビールすき透り
 裏に裏、或日純情を嗤はれる

同	大版	和歌山	松江	京都	大版	高松	兵庫	鳥根	大版	鳥取	同	同	同	同
いの助	柳次	翠穂	榮吉	富美三	素萌	柳夢	政郎	六郎	萬雷	法泉水	笛秀	良之佑	堅	愛子



夏は夏はしづきをあげて子等とゐる
 特高課主任かうして蒼白し
 ヨイトマケ背中に嬰兒しぱりつけ
 エブロンをはすしてマダム何處へ行く
 たゝかされる事もうれしく子をあやし
 分別に年が抑へて哀れがり
 老妓とは淋しき文字の一つなる
 ふと喋舌り過ぎて淋しい未亡人
 コムバクト鼻を延ばして化粧をし
 苦しんだ後の浴衣の軽さかな
 三日目に同じ絵が出る紙芝居
 自動車の音へ窓まで子は走り
 紙芝居もう二三人待つとする
 冬オーパこんな便利な金が借れ
 お達者でと只五月雨をきく女

松江 素月
 大阪 春彦
 大塚寺 小松
 今治 春峰
 松山 窮巢
 六版 曉童
 今治 三灯
 香川 柳三
 大阪 柴玉
 和歌山 五一
 豊中 遊歩
 武庫川 雨蛙
 大阪 冬光
 同 かつ葉
 同



讀經の佛間でうなる煽風機
それぐの思ひ日曜白んで來

母逝きて

リンゴの皮のながく女思ふ
は骨に牛乳代のおしまれて
金力に野邊の葬りの長い列
雇はれて行く海岸の男まへ
流星に友の病氣が氣にかゝり
肩書が衛生評議員とは寂し
島の娘へ勝太郎ばりの聲を出し
干物の未だ干してある夏の雨
無心など聞いては居れぬこの暑さ
背かれた同志慰め合うて生き
泣いたとて奪はれし夜の消え失せず
今朝もチョコさせてくりなかつた妻であり

同 同

葉光
角丸

松江

莞路

兵庫

白菊

大阪

青兒

京都

竹雅

和歌山

茶目夫

同

千代吉

肥伊

忠次

大阪

一羊

同

一杯

神戸

巨鯨

松江

冬生

出雲

水煙



故郷へ去ぬ下女に買はれた名古屋帯
 割引の電車無産の姿なり
 晩酌へアツパツパーが氣に入らず
 山の中空を案じてけつまづき
 生れきて努力からなき三原山
 弔文の誤字にも涙誘ふなり
 病む子らに山のひるがね鳴りわたる
 日暮れ人戀ひゐたるおしろいや
 見つむれば瀧壺俺を引つける
 倅せは朝のバジャマの乳とパン
 いつはりの戀よいつまで続くだろ
 槍穂高眠られぬまゝに縦走す
 寝るだけの女工に楽し牡丹刷毛
 妻としてあしたへ生きる軽い愚痴
 丸髭の泳げぬ水着砂へ來る

高知	大阪	同	同	同	同	京都	京都	同	大坂	大坂	京都	同	大坂	大坂	高知	大阪
鐵	市	子	蝶	朗	白	愚	眞	醉	雨	小	ゆ	雨	草	太	公	望
吉	坊	木	路	人	扇	寵	弓	羊	蛙	舟	き	聽	路	望	望	望



武玉川初篇研究

(去)

梅 本 秋 の 屋
森 子 東 省 二 魚

(460) かつらへも加茂へも遣らぬ佛の日

東 魚 加茂川へも桂川へも釣などにやらぬと云ふのであらう。(神社へ對する忌みの方かと思つたが、さうすると桂があてがつかぬ)

秋の展 精進日であるから、川狩の如き殺生を禁するのである。

省 二 兩河を合せ流れて遂に淀川となる。

(461) むかしも今も同じ本膳

東 魚 本膳といふものは、昔から版に摺つたやうに猷立のきまりきつたものと云ふ、穿ち味の諧謔であらう。

秋の屋 賛成。

省 二 前句と關係して興を加ふる作ならむ。

(462) 小野照崎をさしの弔い

東 魚 小野照崎神社の前を、さし荷ひの弔ひが通る。丁度蓑輪の方へ行く道で淋しい。(吉原の朝歸などが、ちらほら行き逢ふ位の趣きであらう)。蓑輪は七三昧の一つで、即ち焼き場のある所。

秋の屋 此社のある下谷坂本町は、今は電車通りであるが、昔は甚だ寂しい町であつた。吉原へ行くか、焼場へ行く外は、人通りの寡い土地であつたのである。

省 二 小野照崎明神社の繪が江戸名所圖會に載つて居る。長つたらしい名には傳説が附會されてある。

(463) 落着顔の堀て三味線

省 二 「堀の茶は味も覺えず呑殘し」といふ程な思ひだの

に、これは又頗る落ちつき拂つて居る——内心は判らぬが。

東 魚 野暮らしくさうがつく、繰込む事もあるめい——と通人がつてゐるが、實は魂すでに先方へ飛んでゐる、半可通だ。

秋の屋 山谷堀につけば、吉原は目睫の間にあるから、入榎の鐘に花の咲く時刻まで、悠然と盃を擧げてゐる。

(464) 約束たをれさらされて居

省 二 約束倒れで、約束を客に反古にされ、待つ身は遂にお茶挽。

東 魚 張店に煙草盆と首引をして居る謂であらう。

秋の屋 紙の蛙の呪も効驗がなく、引四つまで張見世で、不景氣な顔を晒して居るのである。

(465) 燈籠の賣れた夢見る小道具屋

省 二 「先祖代々賣れ残る石燈籠」など、かなり厄介視せられて居る。小道具屋も亦同様、夢に迄もみる。柳樽三篇には石燈籠ある夜賣れたる夢をみる。(原本小道具屋とある)

東 魚 小道具屋だから、賣れて呉れ、はい、と、値に係らず荷厄介にする心持ちであらう。

秋の屋 「小」は「古」の宛字であつて、小さい道具屋ではないと思ふ。小道具屋で石燈籠を賣る筈がない。

省 二 多分お説の如けん。只小道具を取扱つて居る古道具屋、即ち貧乏武士の品物を察せさせる爲めかとも思ひはしたのであつた。

(466) 五月雨や仕廻の日には横へ降

省 二 しどくとふる五月雨、天から漏るとでも言ひたく眞直に落ちてきて陰鬱だが、ツユあけの仕舞の日頃には、風交りて横へ降る。

東 魚 雷がなると梅雨があけると云ふ。梅雨のあける日とみえて、雷鳴強風、雨は横降りにふるといふ凄しさ。

秋の屋 風交りの強雨が一過して、頓て梅雨が明るのである

(467) 松風の和らかに來るひとへ物

省 二 私は綿入を着ない、單物を好む。肌觸りに和らかいそして、どこか男性的感があるようです。瘦せて體力が乏しい關係から、軽い物を欲するのであらう。松風に吹かれて居るは心地好ろしからむ。

東 魚 初夏の爽やかな感じがされる。

秋の屋 單衣の袖をふく松風は、如何にもすがすがしく感じられる。私は素衾を最好むが、これが一番よく肌に馴染むのである。

(468) 墨染のちからつくには寫し物

省 二 寫經するのである。中七に誇張味をもたせたもの。東 魚 「箸より重いものは持たない」といふ俗言と同じイキで、寫經位がせきの山の力業だとの意味であらう。

秋の屋 寫經であらうが、墨染は僧か尼か、僧ならば辨慶、覺明のやうな、筆札を善くした荒法師も居たから、此句には充填らぬと思ふ。

(469) 猫の二階へ上る晴天

省 二 猫は天氣模様を知るといふ。其日の感じをねらつた作。前句があれば興も一層なのであらう。

東 魚 猫が前足で耳の上を撫るやうな恰好をすると、雨がふるとか云ふが、そんな事迄考へずに、單に二階へ上つてきた處に、長閑な晴やかな氣分が受取れる。それでよろしいと思ふ

秋の屋 猫が階へ上るのみで、何の變哲もない。これを鼠

捕らずの句といふ、

(470) 此世と闇の鵜を連れて出

省二 鵜を使ふには闇夜がよい。「鵜舟に燈す篝火の、後の闇路を如何にせん、實にや世の中を、うしと思はば捨つべきに……闇になる夜をよるこべば」(諸、鵜飼)

東 鵜を虐使して殺生する 未來の因果應報も知らずにと云ふ心持を、「此世も闇の」云つたのであらう。
秋の屋 謡曲から取材した句。

(471) 棒を馳走に遣ふ神取

省一 原本對照を希ふ。神取は誤寫ならずや。

東 魚 掛取ではないか 鹿島の神官から出た棒の名人があつたと思ふが。鹿島に縁の深ひ船乗が、習覚えて棒の一手を見せるのかと思ふ。大駄勞解。

秋の屋 掛取の宛字に相違無いが、鹿島に關係のない句としても、其意を酌取る事が出来る。

(472) うつの山捨たいやうな鐘に逢

省二 宇津山の句(272)に出づ。鐘を邪魔にして居るのはその險阻の様も知らる。

東 魚 山道に鐘などは、御難な代物であつたらう。

秋の屋 宇津の山は所謂葛の細道で、險阻といふよりは、樹木が鬱蒼と生茂つてゐるので、三間柄の槍などは、持歩くに困難する故斯く咏むのである。

(473) 遠く日のさす横笛の肘

省二 「一理屈ある横笛の肘」(ム十六)など、横笛の時はよく咏まれて居る。私も少し稽古をした。遠く日のさすが、

尺八などでは感じが應はしくない。

東 魚 張肘をした笛の横へ、其肘支けほのかに日射が届いてゐる。それを「遠く」と感じて現はしたのであらう

秋の屋 「遠く日のさす」といふのは、神樂堂か能舞臺の光景であらうと思はれる。

(474) 六角堂を乳母かしこなし

省二 六角堂へはよく人が集り遊び場所ではあつたのだが 東 魚 六角堂へは始終兒を遊ばせにくる、イヤ遊びにくるのかも知れない。其の乳母が我家のやうに振舞ふ、一番お馴染だと云ふ顔で振舞ふ様を「乳母かしこなし」と詠んだのではないか。

秋の屋 此「六角堂」は、京都の六角堂では無く、大きな寺院に有る經藏のことで、これを俗に六角堂と唱へた。夫れは堂宇の内に、神輿のやうな六角形のものゝ据えてあり、六本の長柄が附いてゐて、其長柄を推すと見る／＼回轉するので、兒童等の遊び場所となつたものである 淺草寺にこれが有つたと記憶するが、現存してゐる歟。

省二 お説の如きかも知れぬ、が二代男に「此處(六角堂)は洛中のお乳の人の集り遊び所なり、錢太鼓唐人笛の響、竹馬の鈴の音物騒がしき」で、句註になりそう。六角堂は捨子も預り世話をなし、又出替のなぐれ者が、六角堂へゆけば周旋して呉れた、今日の紹介所もやつてゐた。

(475) つまめは淋し金襴のうら

省二 表裏の差のひどいもの、だから「つまめば」が妙。

東 魚 金襴の表の方が硬い感じなのに、裏は一寸つまんでも、あるか無いかわからない 其心持を「淋し」と現はしたのであらう。

秋の屋 金欄の裏面を看たならば、誰でも撮むでみる氣が起るであらう。佳句である。

(476) 惚たとは短い事の言にくき

省二 「惚れたとは女のやぶれかぶれ也」(古川柳)とあるモダンガールはラブなど平氣で口にするが、そんなラブと惚れたとは、深淺さが斷然違ふ。

東 魚 面白い。前掲古川柳と對照して、全く其表裏、それ／＼の面白味を感じる。「短い事」も云ひ得てゐる。

秋の屋 自分に女を口説いた経験はないが、女に對して直接に、「惚れた」とは言悪くからう。

(477) ひよこの付て這入灌佛

省二 佛生會に甘茶を灌ぎにゆく足元へ、雛がついてくる寺院附近の模様、純朴な信仰者など現れて居る。

東 魚 田舎の佗びた寺の様であらう。

秋の屋 參詣者の純朴さよりも、鄙の古寺の光景が聯想される。

(478) 烏の歩行瀬多の元日

省二 雪を頂く山を背景に、あの長い瀬多橋を鴉が歩く。元日らしい靜さ。

東 魚 元日には餘り出歩かなかつた昔の風習から、晴やかな長橋のすが／＼しい風景が思はれる。

秋の屋 瀬多の長橋に夕陽とでもいふ所を、烏を點景としたのは凡手で無い。

(479) 閏五月のいたつらに降ル

省二 陰曆には閏月が出来る。「年々に餘の儀にあらず降りつつく」のに、閏では「さらてに限りなき雨の五月かな」(昌叱)

東 魚 當り前にふる丈で澤山なのに閏月を又お添物とはと云ふ心持を「いたつらに」と云つたので、「釋ケもなく」と云ふやうな意味合であらう。

秋の屋 異議無し。

(480) 火の入た酒出盛にほとときす

省二 新酒は味の調熟と變敗を防ぐため、夏時火入れをなす。昔は酒煮の祝を行ひ、酒を吞ませたもの。

東 魚 季節のものを取合て「夏が來たな」といふ氣分を出した丈けと思ふ。但調子が強い處に何となしに引きつけられる。

秋の屋 俳諧の季題に「煮酒」とあるが、此酒の火入れで、夫れに時鳥を配したのは、氣が利いてゐる句だと思ふ。

(481) 西日の宿の目を細く呼

省二 西日がさしてまぶしい。目を細くして呼ぶのも愛嬌その呼むでゐる女たるや……

東 魚 輕妙

秋の屋 此句は驛路の旅籠屋の出女が、往來の旅人をよぶ情景を咏むたもので、「西日」が主眼である。

(482) 鶯の突放されて實とときす

省二 杜鵑は鶯の巢の中に育つと謂ふ。鶯は春のもの夏時には聲衰えて鳴かざるを以て、鶯老ゆといふ。杜鵑は夏時尤も盛。「鶯に他生の縁か時鳥(重久)」

東 魚 巢に居る間は鶯で扱はれてゐたが、巢から飛出すとホトトギスだとの意。「突放されて」が面白い。

秋の屋「後足で砂を懸る」といふ俗諺のやうに、鶯を突放ちて巢を出る。時鳥の個性がよく表現されてゐる。

(483) 中氣に成て亭かつふれる

省二「中氣に罹つてからは、亭の世話も行届かず、又亭を使用する來客も稀となりよし客はあつても樂しめず―荒果てにまかせてある。

東魚「庭先の散歩も出來ないので、亭がすたれる。

秋の屋「茶の湯好きの隠居が、中氣に罹つて後は、病者の脚と共に亭の柱が、全く立たなくなつたのである。

(484) 泊客最う隣から人の口

東魚「あれが嫁さんになる人なのだらう、只の泊客ではなさうだと、近所の金棒曳連が噂をする。

秋の屋「人の口には戸が立てられず、客分の分の字に譯があるのである。

省二「客分といはれた女立のまゝ」の客ならよし。若い後家の宅への泊客でもあつたなら……

(485) 涼しくも男を立る三ツかなわ

東魚「戀の三角關係、自分だけ男らしく耐え忍むで圓満に戀を譲つてやると云ふやうな場合かと思ふ。

秋の屋「三人にて談合するを、俗に「三金輪」といふ。

省二「何かの談合とつくりと、いかさま三人三ツ金輪（紙子仕立兩面鑑）

(486) 大屋に成つて負る六月

東魚「井戸替だとか、疊替だとかに逐はれて、大屋が閉口してゐるのではあるまいか。

秋の屋「江戸の六月には、山王、神田、午頭天王等の大祭があつて、店子の者にも出費が多い故、新に大屋となつた祝に六 months 分の屋賃を棒引にするといふ句ではない歟。江戸時代には年中行事の一として、毎年七月七日に井戸替を爲たものであるから、此句には充填らぬと思ふ。

省二「確定した自見なし

(487) 蝶くの種を蒔せる貝わり菜

省二「春の蝶、秋の蝶はわけてある。苗を生じ地を出るのと二寸、漸く苗て二葉なるを蔬とす、これが貝割菜俗に間引菜といふ。

東魚「菜の種を蒔くといふのを、「蝶々の種」としたのが、山なのであらう。

秋の屋「貝割菜は既に種子の發芽したものであるのに、種を蒔せると詠むたのは、少し拙い。

(488) 窓明た大工を譽る丸はたか

省二「涼を呼び得られて。

東魚「湯上りの涼を入れてゐるのであらう。

秋の屋「湯殿の一方に、新に窓を明けたのであらう。

(489) 雪を喰ふ女の顔へ日のうつり

省二「雪をたべようとする女の顔へ、ぼんやりと太陽が映る。いろ氣満幅。

東魚「女」は娘子供ではないのであらうから、廓の女か。さうすれば居續の情緒である。

秋の屋「田町か箕輪にある、妓家の別荘の光景らしく、脂粉の香がするやうである。

(490) 硯の膝を廻るおし鳥

省二 おし鳥はをし鳥也。短尺と筆を手にして居る前を、をし鳥が浮てゐるのは、よく繪となる。「硯の膝」に因て池畔風流の建物をも想像せんとしたのである。

東魚 池へ突出した亭の歌の會なのであらう。但「硯の膝」は果して省略した辭句か、少しく無理に思ふが。

秋の屋 曲水の宴を咏むた句であらうが「硯の膝」が面白くない。

(491) 取揚婆々の供も飛々

省二 取揚婆さんと呼びに行つた者も亦、大急ぎで歸る。
—(取揚婆は大名の行列でも、きつて急ぎ得たものの由)

東魚 あわただしい光景。

秋の屋 産婆に供は少し可笑しい。

(492) 雪ころはしの盛かへか出る

省二 「盛かへ」は面白い言葉だ。後から後から。

東魚 又新ら手の雪ころはしの、一團が出る。

秋の屋 これが吉原の仲之町であつたら、一層面白い光景であらう。

(493) 役者の草鞋栗の落る比

東魚 顔見世狂言に出演のため、京へ上るとか、江戸へ下るとか、旅へ出ると云ふ意であらう

秋の屋 十一月の顔見世に出勤するのであるから、十月木々の落葉する頃に、旅行をするのである。

省二 言葉が切りつめてある作だ。

(494) たけの揃わぬ加多の洗濯

東魚 加多は「濁」ではないかと思ふが、濁ならば漁夫の

生活がうかがはれる。

秋の屋 紀伊國名草那加多(蚊田また加田とも書く)に、粟島(これも淡島と書く)神社といふのが有つて、婦人病を祈ると利益があると云ふ。江戸時代に傀儡子の如く小箱を頸に懸けて、手に鈴を振鳴らし、「これは紀州名草の那加多の淡島大明神云々」と、淡島の神徳を禮讃した歌を唄ひながら、錢を乞ふ者が來たが、其乞食の着物を洗濯するの歌。「江戸名所圖會」卷之一、葦小路の條に、此淡島の挿繪が有り、又常盤津の淨瑠璃に「淡島」といふ一曲がある。

省二 加多は形見の浦の事、紀伊海草郡の海濱、漁師の着物ゆゑ、丈けが揃はぬのではなからう歟。「養新しき加田の後家人」(ケ二三)。尙ほ「家並や鳥賊干す加田の朝日和」(十魚)なる古俳句あり、和漢三才圖會に紀州土産、加田和布と出づ。(ケ二三)に「建舩もしつほり加田の浦時雨」がある。東魚氏から「星よりまれな加多の夫婦寝」(ケイ)ありと御通報をうく。武玉川には「恥かいて加田へよめ入」(一四)。「明たての戸も定まらぬ加田」(一一)などある。南海電車の廣告には、加太巡りが記されてある。

(495) きんか天窓を撫る若者

省二 金柑頭(電燈頭)、毛のない頭を撫る若君の惡戯。一はげ山もかすめめめる春の日に、きんかあたたまは猶ぞかがやく。(萬才狂歌集)

東魚 永年忠勤を盡した老臣と、幼君との親しみが、よく現はれてゐる。

秋の屋 きんか天窓といふは古い語で、延寶七年印行の「兩吟一日千句」に

きんかにて四國廻りがなる物か 友雪
蠅はすべれど殺されもせず 西鶴
といふ句が有る。

雜筆春秋

磯谷を偲ぶ

安川 久流美

太陽は東の山から出で、西の海に没すると思ふのは裏日本にのみ住む者の偏見であつて表日本の海岸にあれば之が反對となる譯である。だが山に入る夕陽よりも海の沖に沈む夕日は確かに美しく彩られて印象深いものであらう。私は北海道の西海岸、後志の磯谷に約半歳を暮したことがあつて、毎日海に没する夕日に馴染んだものである。天氣に依つていつも變化がある。筆を以て形容し難き美しさ氷結の上へ恰も玉子の黄味を落したやうな景になることもしばしばあつた。大體が雨量の少ない土地だつたから、座敷の縁先から夕餉の膳に對ひながら、この美しい夕日を拜むことは一日の樂しさであつた。夏だつたから波も靜か、加ふるに磯

近く、昆布の岩があつてその趣きは平凡でなかつた。父の晩酌二本に對し、私の膳はいつも一杯のブドー酒がゆるぎされてあつた。輪島塗の低い膳に、夕日が反射する時、父は陶然として戲談の一つもいふ柔か味があつた。よくホツケといふ肴の刺身がつけられた。其他ソ、エのさしみアブラコの焼物内地とは大分變つた魚に舌鼓を打つたものである。一本から一本の銚子にうつる時の父はとても御機嫌のいいもので、時には山へ遊びに行かうと口を切つた。山とは海岸の反對にある小丘で、お茶屋が四五軒ある。いはゞ遊女街であつた。少年の私は何の野心もなく父の言葉にうなづいて父の妾と共に山の丸一といふお茶屋へ遊びに行つた。いふまでもなく女も二三人招いて、父は更に酒をのむ。私は女から「若旦那」とか何とかテレ臭くもてなされたものであつた。その丸一樓は父が若干の金を貸してある關係上特に父に對して待遇がよかつたのである。夕化粧に首をついで夢二の繪が

ぬけ出たやうな「皐月」と名乗る、樓の花頭も座に待つて、さまで愉快でない父のお酌をしてゐた事を憶えてゐる。父の妾は三味を取り上げて小唄などを歌つたやうにも思ふ。天下泰平のまどろである。斯うして父と共に青樓へ登つた十七の少年の頃は鯨臭い漁村に海が荒れだした十月の末まで暮した。

いよ／＼父と共に内地へ歸る時、夏休みに歸省の女學生と共に氏子神のほとりで歌つたこともお名残りとなつて、村から、黒松内といふ小驛のある所までガタ馬車にゆられて歸る時は、追が馴染んだ友に別れるのはさみしかつた。

二十五年といふ歲月は流れて、もうその頃の漁村にも、文化の風が吹き電話、ラヂオいろ／＼の意味で町の匂ひが漂ふてゐるだらうが、自然の色は變ることはなく、あの思ひ出多き海に春く夕陽のみは今も美しく海面に彩られて遠く岩内の港につゞく雷電山の薄靄のかゝつた沖のけしきは昔と變らぬ情景を見せてゐることであらう。生きてゐるうちにこの磯谷

の村へ杖を曳いて見たいと今も思ふ。

(七月十二日稿)

僕たち

澄田 羅門

A 掌の上の吸殻

僕達の毎日の労働は毎日新鮮である。神聖である。そして苦痛である。

僕達——畦をまたいで煙管を弄ぶのがいつちいゝ楽しみである。(未定年者で生意氣だと叱られてゐるけれど)

煙管をくわへると、晝の月はやさしい出雲製織株式會社の煙突が煙をつなぎ、青い風が吹きぬける空も青い野つばら。僕達の掌は皿である。

僕達の掌は土を叩いてゐるから、みなさんからかあこがられて、日と汗に困苦を續け熱してゐるからなんだ。並んで、掌に吸殻を吹き吸ふ、楽しい風景、のんびりとした風景——楽しい。

青い風がつつと、鳴ると、掌の吸殻がころ／＼細い煙を立て、轉るのを、指の

律動が、巧みに、掌の、中央に占めさしてくれる。お上品でゐらしやる方や、やさしい方が弄ぶべきことでない。

そして次の、労働にうつるべく、掌の上の吸殻を、青空へ、フツと吹いて立つ。

B 蛭

一びき——二びき——

みにくい波紋が黒く泳いでゐる——蛭。

蛙が蛙を喰べるのに驚いたり、いつかはへた蛙が懐しかったりするが、蛭ばかりは僕達親しみを感ぜない。

第一、蛭つてやつは、吸盤を持ち離れともない、のろ／＼としたどす黒い顔目を描いた皮膚を持ち、押へると、まるくちどかなつたりする不気味な奴である。蛭はアルカリ性分を一番きらふ。灰の中にはなしてやると血を吸つた蛭は、血を吹き乍ら小氣味よい程、伸び縮みして死んでしまふ。二つに蛭を切つてみたり、小便をふつけてみたりする僕達。僕達は毎日蛭に攻められてゐる。

床凡山無駄話

廣江 天痴人

床凡山週遊道路が出来た。私達の幼年期にはゆがんだ松の五六本と露坐の大佛と芝の傾斜のみだつた。松江の南を區切る小丘床凡山！今は水道配水池が出来、TK放送局の鐵塔が市民を威かす如く聳え、五十錢で白粉またらなサービスをやるとかやらぬとか噂ある飲食店の出張所が並び、近くは若槻さんの銅像が建つか！猫額大の小丘をすつかり人間臭くしてしまつた。この頃は星月夜を仰ぎ乍らホルモンの調整を計るカツブルの浴衣姿もちらほらして夏期特別取締のサーベルの眼がびかり／＼。爺さん婆さん達の逃避所の大師堂からは朝夕思ひ出した如く鐘が聞え近くの墓地は新しい卒塔婆がたえぬ。週遊道路の兩側には寄附者芳名付きの貧困的な櫻が申譯ほど葉をつけて苦笑ひしてをる。この小丘の一部にはS牧場(?)もあり、三頭弱の乳牛がスロースビードの啼聲をもらす。いつやらは松江

(七月六日記)

人間は

辻いの助

人間はまづ優越感を味ふことに焦つてゐる。

× 敏感なる競争心は勇敢なるエゴイストを養成した

× 「あきまへん」とか「駄目だ」とかいふやうな言葉を平氣で云ふ人間には油斷するな
× 氣取つて歩く奴は、えてしてバナ、の皮で轉び易い

× 昔のチャーナリストは人道主義者であり現代のチャーナリストは物質主義者である。

× 「彼奴は馬鹿だ」といふとき「俺は賢い」といふ意識がある

× 人間の最も眞剣な顔付きは腹が減つて飯を喰ふときである

雜記帳

松丘町二

前號の僕の山雨樓君へ答へた文章に例として挙げた句のうちで、間違つてゐたことを發表後氣がついて大いに恐縮し汗顔した。別に論旨の上に誤謬は來たさぬが、さりとて餘り名譽な話でもないのだから訂正して置きたいと思ふ。

どの汽車も胃袋を運んできたよ
は七、五、五ではなく無論五、五、七であり従つてその次に挙げた二句のうち
一目逢ひたいと坑口に泣き崩れの句を抹消して(これも七、五、五ではなく八、五、五である。全く不注意だつた)

姑が出てゆくときとくすりと笑ひを挿入すべきであつた。

以上の二點山雨樓君並に讀者諸氏へ御

洋畫研究所の御歴々が郊外スケツチとしてやれて夢中でカンバスを覗き込んでる鼻つ先へミユーツと角を臨場させいとも和かな鼻息をもらしたもんだから御上品な洋研の方々の心臓を一たよりもなくかきみだし大切な命をしつかりかゝへてお逃げになつたとか。「どうです又行きませんか」フーツ、イヤもうたくさん!」——とも角どつちを向いても俗、俗、俗! 背筋が寒いです。俗と言へば松江の政治屋諸君は人間萬事遊ぶに若かずと考へ給ひてかやたらに遊覽道路だのバスだの外客誘致だのと不生産的な方面に特別サービス餘念ない有様。競馬場あり、運動場、野球場も雨さへ降らねば泥田ではないものが出来、千鳥城公園も設備を良く(ラシデブに?) するといふ。四萬五千山陰道第一人口の松江市民諸君大いに遊ぼう人生オンリー五十年ぢやないかとある。四十年來の蒸し暑さだといふ七月の朝つばら汗だくでなすりつけたのがこんな貧弱なインク汁です。島根出身の町二さん鶴峰さんフ、ンと笑つて見て下さい

説び致します。

○ 「川柳味とは何ぞ」は僕の愚論中の傑作として、杏三君はじめ友人連をひんしゆくせしめたこと、豫期以上の反響なので慌てゝ「川柳味に對する私の態度」といふ文章を書いたりしたが、各地の柳誌で「川柳味」についていろ／＼新しく論ぜられてゐるのを見ると「川柳が藝術として生きたるためには傳統を見直して改築すべきか。之を否定して破壊し新たに建築すべきか。即ち川柳味（滑稽、皮肉、穿ちを指す）を尊重すべきかすべからざるか」といふ問題は別に新たに論ぜられなければならない」とあの時書いた僕の眞意が果されつゝあるわけで愉快である。過去から今日までの川柳のもつ川柳味とは、冷酷な客觀的檢討に依れば滑稽、皮肉、穿ちであると斷定し認識することに依つて、昨日の川柳を否定することも出来れば、明日の川柳への飛躍を約束し期待することも出来ると思ふ。今更「あれは逆説だよ」などと卑怯な辯解はしないにし

ても。

○ 久良伎氏から最近「講演」といふ小冊子を贈られたが「川柳に就て」なる氏の講演の中に正岡子規が古今集以下の歌は悉く駄洒落であるとなし、川柳は理屈であるから詩ではないと云つて事毎に自分に反對したことを述べられてゐたので、僕はゆくりなくもこの柳壇の老大家が、未だ若かりし明治中葉の短歌革新運動當時、子規、左千夫、鐵幹らの間に介在して仲々活躍されたことを物の本で讀んだのを想ひ出した。

明治三十二年頃、大學や高等學校の學生で組織した若菜會の歌を、讀賣新聞紙上で批評したり、雑誌「大帝國」や「心の華」等へ伊藤左千夫と共に歌論を發表し、有名な子規鐵幹不可並稱説に就て「根岸の短歌會からこの間鐵幹に向つて開戦狀が發せられた。是れは今日我も味増も同一視する俗界の明盲共に對してのみならず、歌壇に先輩顔する一種の人類

に對して大いに必要」とか「子規子とてももとより後輩たる鐵幹などをイヂめる精神はないのであるが」など、蛇は寸に對しての譬の通り、氏の面目躍如たる文章を載せて與謝野鐵幹を激怒させたり、しかも結局は鐵幹をして「この感情問題に就て阪井君の男らしき態度に十二分の敬意を表し候」と云はしめたりしてゐる。とにかくその頃氏は相當に暴れたらしく明治三十五年に出した「文壇笑魔經」なる著書は當時の歌壇を諷刺揶揄して骨をさす底のものであつたらしい。

氏はまた新派狂歌なるものを創めたが仲々佳作が多い。二三を記すと

ニイチエ何トルストイ何我にありて甚太が味噌の香をきくが如し
ひむがしの豆大の國の寸詩人蚤によく似て躍り跳ねるよ

日本の本の詩人の頭この頃は紅毛が生ひてもうもうと啼く
當今の久良伎氏に往年の意氣を缺くと見るのは僻目か



不朽洞句稿

麻 生 路 郎

賣上のこれつばかしに笑つてしまふ
入道雲夫婦喧嘩もあつおます
死んだ人の噂夜寒の顔になり
君・君・憂鬱を配つてあるくのは止せよ
人間味紙型のとどくたなごころ



日本名所名物川柳

大阪の巻

麻生路郎選
大西長三郎畫

日本の名所名物を川柳で残したいと思ひ、その第一着手として手近な大阪の巻を約一ヶ年計畫を發表することにした(略)

(三) 四天王寺

經本書き筆で參詣者を招き
一枚は俗名のまゝ天王寺
信心へ四天王寺の蟬時雨
天王寺授業の鐘が隣りから
天王寺の土産を孫に馬鹿にされ
天王寺利久の音の中に鐘
集印帳めくれば四天王寺なり
社會鍋四天王寺を見逃がさず
デパートの窓で見直す天王寺

俊一 潮人 文蝶 棹二 聞路 白柳子 白峯 八歩



その乞食まだ生きてゐる天王寺
 天王寺妻の願ひは尊かり
 天王寺都市計畫も齒が立たず
 天王寺小さい門も開いてゐる
 天王寺晝寝しにだけ来るもあり
 天王寺なるほどな一と手を合せ
 天王寺無錢旅行が來るところ
 求職のある日天王寺で暮れる
 に繪すれば雲を浮べる天王寺
 御札所茲はなにはの天王寺
 龜の池ぬらく今日も日がくれる
 錢の無い顔が天王寺の鳩と
 行先のきまらぬ足が天王寺
 犬つれて四天王寺を通りぬけ
 蛸おどり子供の年になつて見る
 天王寺經木は誤字の儘讀まれ
 四天王寺坂を下ればネオンの灯
 天王寺松鶴をつれて來たいなり

おさむ 青踏 比古 かはる 山雨樓 曉童 新水 波濤 同 葉平 同 小柳子 同 豆秋 同 紅 文蝶 白柳子



川柳塔

路郎選

山本丹路

運轉手誰が乗つてるとも知らず
灰皿につもる淋しさだれが知る
物干にゆれる水着は燦と赤
衣装を散らして夏のお嬢さん
市場通ひの財布を帯にねちこんで
惚れきつたほかに話はなかりけり
月もいでこよ星もきらめけ淋しいぞ
鉛筆がないので二階からおりる
古典的な愛情を縫ふお主婦さん

關本雅幽

胡瓜あかく小さくねぢれたり
青き蚊帳がふるさとに似て涼し
夕焼のかなたに碇沈めんか
星流れたを煙突の知らず
人間を疑ふ猿と向ひ居る
一年も失業頭分けてゐる
もうこゝで結構ですと借衣裳
朝田新水
吉田水車

雨宿り女同志は柄をほめ
ノータイになほいたましき咽喉佛
我が軒はつばめにしてがよりつかす
舉手の禮ちぎつてほかすかたちなり

福田山雨樓

人を嘲けり唇を噛みしめぬ
鯉釣り場旗へ夕立來さうなり
八月を烈火の如く牛叱り
催促をされて蜘蛛の巢掃きにゆく
中風で死んだ香奩立ち話

藏首の多ければ (三句)

四十年勤続藏首の夏羽織
藏首の日に永いお世話を云ひに來る
閑につく顔だ若さを取り戻せ
近畿の旅から
十人で宿つてうれし雲の峰

宇治平等院拜觀

盜まれるやうに國寶靜かなり

宇治興聖寺にて

この奥に寺ありとてもいゝ景色

橋本緑雨

立山登山 (四句)

頂上に立てば日本は山ばかり
室堂へ二日がかりの荷がとゞき
立山を問へば合力汗を拭き
寒かつた山を見かへる夏の旅

○

水谷鮎美

手をつなぐことおもしろきひとつなる
重壓の天井とある反抗兒
土用うし鰻は律義者の箸
あおすじは額にうきし人の呼吸
臥てゐればたゞ眞白なる夏となり
心太素顔みつめてゐたりけり

替唄のさびしさに殺されてゐる

このころ

社告 おほきく僕は汗する

須崎 豆秋

さびしさにタオルを長くさげて出る
秋風の中で乞食に拜まれる
嫁つただけでアドレスがない

迎凱旋兵

本國の土にしつかと又銚する

市場没食子

押賣へ晝寢の足は男なり

若い母アセボだらけの子と涼み

丸髻に近眼バーの主人なり

君と僕酒がしつかり結びつけ

子の事で夫婦が暑いのに喧嘩

亡弟一周忌、八月一日

白靴は兄が遺品にはいてるぜ

行水の順未だ姉に廻り來す

姫田 夕鐘

許すゆるさんのとふたりはおかしき
水撒きがみづすてゝゐる俄雨
個性をまげてく拾圓程儲け
髪ときあげてく夏の汽車
炎天に働く人をデーと見てゐたり
長二郎と並ぶと損な顔となり
すてがたい女と座る窓の色
肩書は立派だすけど貸は貸
とことん飲んで蜘蛛に似て來る
レベルを下げて散財してこませ

清水寺

清水を墨繪にさしたひくい雲
清瀧にて

河鹿をはめてビールをつぎこぼし

中澤 濁水

轉んだり覺めたり夏の詩をあさり
人生も斯や室戸の浪に立ち
銀貨殖え紙幣が足りない二日酔
獨身にびんとこたへる睦じさ
又伸びて無精を見抜く庭の草
廣江天痴人

自作兼地主助役に推されたり
青物屋残る西瓜に秋を見する
黒ダリア異彩をてらふ如くなる
蹴だこに趣味ではないぞ謄寫版

法泉子君に酬ゆ

理想追つかける如く下宿又變り

首藤竹楓

冷汗をぐまかす眼鏡持上げる
鈴虫を鳴かし夏の夜の圓扇
別荘で風邪ひいて來る金もあり
空想はドンキホーテとなる我や

湯上りの袖を捲くつて來る將棋

春元紀太

當ての無いみやげ買ふのも旅の味
もうぢきに門司だくと刺つて居る
酔になつた酒を夫婦で喫ぎくらべ

友人チアスにかゝりて

戀持つ血醫者冷やかに抜き去りぬ

奈良井柳人

仕方なく月と一緒に歸つて來
消電に女の理性するどかり
人の世に飽かず結婚するつもり
先生が帶を結べば皺が見え

熊谷紅

在りし日の父佛像に似て裸
タクシーに乗れる身分の不渡よ
野心勃勃々和服着て來る
返事のいらぬ賑やかな客

西村明珠

本船にくつつく様に子がねだり
ハンカチフ女房持ちと見破られ
食べ過ぎた腹は悪にはなり切れず
思ひ出を語れば長し月の下

村松夢裡

インキ壺返事は明日の事になり
重點はハンマーとペンと別な事
隣りは普譜場金だ金だよ

石曾根民郎

檜ヶ岳殺生小屋にて

山に雨氣を重らせる靴かと思
秋めくと思へ埋れし天才よ
手の相は知らずさびしき握るなり

石森靜太

やまひいえす啄木歌集がよごれてる
粉ぐすりをさみしくなりて吹いてゐる

武川舟路を悼む

計を聞きし朝のしやぼんの泡立ちし
平岩司郎

戀に似てるがだいぶ逢はない
無難作に家賃あつめて門構え
突飛な問ひに兒をいだきしむ

大西八歩

麗人の靜かに拂ふ顔の蠅
殘忍な音の一つの蠅たつき
散財にあきると時計許り聞き

奥野禿山

見つめると空もなか／＼忙がしい
夕顔よ呑もうおいらは淋しいぞ
叱らるゝがまことに嫌やの年をとり

河合紫石

女房にテキを焼かして至極無事
世を拗ねて暮せば秋の日も長し

藝者フトあんまり弱い身をかこち

生田翠夢

息すまるこの一ときの唇の紅

けうとくも眞夏の夜の物思ひ

尼緑之助

煙突がゆがんでる笑へぬ町ですが

養子かと上から下を見直され

妹尾變人

癩癩の力で蠅が殺される

肥えてゐる事實疊が凹むなり

竹内機見女

緑吸ひし黄色き肌の息づきて

だあれもま戀しくはありませぬ花の影

江戸みつる

疑へばあまりに自分が淋しくて

有る有閑マダムへ

若き日と變らぬ戀を持ち合せ

大官をおだてゝ明日の記事にする
あいまい屋腕を捲つて女ゐる
喜多春秋

疊一枚家主の思案
宮岡白峯

儲かつた着物よ蟬に似て淋し

晝深く心の底にいさつまり
松下小柳子

腕組の欠伸となれり貧しき日

岸上錦石

君と僕ジョツキが空けば角が立ち

喜びを包みきれなく煙草すふ

荒井英賀夫

父病む

御神水信する父の淋しくて

野球見る此處にも金にだてあり

中西おさむ

父逝く

父の自慢ももう聞けず秋に入る

子守唄夫を信じきつてゐる

川柳パイロット欄

富士登山の草鞋

福田山雨樓

川柳は入り易く續け難い。とは一應眞實である。相當巧くなつてその將來を囑望されてゐる中堅作家が、ぼつり／＼やめていつたり、又既に一家をなしてゐる川柳家が何かの動機でもなくも、すつぱり柳壇から影をひそめたりする事例を見るにつけ「川柳を永らく續けること（個人的に）は至難だ」との感を深くする。

ところが川柳は入り易いと云ふ言葉には二様の意味があつて、必ずしも川柳作り易しとは斷言出来ないのである。即ち川柳は入り易いとの意味の一つは、多くの場合俳句に比較しての言葉であつて、俳句に季題だの、切れ字だのと云ふ相當柄はしい約束があるの、で容易に入り難いが、川柳はそれが極めて自由であつて、川柳味を捉へに十七字でさへあればよいなど、半ば誘惑的に用ひらるゝ意味が多分に含まれてゐる。今一つの意味は

川柳は主として人事を取扱ひ、素材着想が何れを捉へてもいいし、川柳になる材料は何時如くなるにも轉かつてゐるから川柳に入ることは容易であると云ふ、甚だ輕卒な我田引水的な見方をするのに用ひらるゝ場合が多いのであつて、共に初心者をして迷はしむるものである。

川柳は決して入り易いものではない。入り易いと思つたのは、親しみ易いと云ふことの錯覺に過ぎないのである。川柳は人間の純なもの、眞實なもの、又は俗を生かしたものに觸れてゐるから、よき川柳は常に親しみのある十七字を示してゐる。その人間味のあるものには、思はず引き込まれる。しかしそれだからと云つて、川柳の作句それ自身が容易なものだと云ふのは、正に錯誤でなければならぬ。

既往百数十年の昔から今日に至る迄川柳

の變遷は著しきものがあるが、その間川柳の眞の精神を表した幾百幾千の名句佳吟がこされてゐる。それらの名句佳吟は勿論既に詠まれた句の蒸返しや反復を避けて、各獨自の境地と技巧とを示さうと思へば、仲々容易なことではないのだ。川柳に手を染めるものは先づこの考へを誤まらぬ様にして、これから草鞋で秀嶺富嶽の頂上を、極める底の心持ちで、一歩々々踏み締め押し進む決心を持つて頂きたい。

川柳へ入る道が容易でない云つても、決して初めから急坂をよち登る様な峻路と云ふわけではない。寧ろ坦々たる道であるが、岐路や小經が多くてまぎらばしいのである。その岐路や小經に迷ふことのないやうに手引の役を引受けたのが本欄の使命である。本欄が課題吟から初めたのは、課題吟の方が難吟より作句が比較的容易であり、作句階程の順序だと認めたからである。

「夏休み」はあまりにありふれた題であつたので、作者を抑つて苦しめたこと、お察しする。川柳は常に平凡から脱しなければならぬのであるから、ありふれた題に、ありふれた着想を捉へたのではない、句の出来る筈がない。それで諸君はどんな苦心を見せてゐるか、一句々々靜かに拜見することゝする。○夏休み登校間近く直疲れ（大阪 清雄）夏休みで放縱な生活になれたので、登校間近になつて物事に直ぐ疲れを覺える。勉強が不安になつて來たと云ふ感じを表はしたものの

と思ふが、そのことが眞實であるにしても、別段面白味が含まれてゐない。他人に迄興味を呼ぶ程の響きがない。「登校へ靴が重たい夏休み」とでもしたら幾分穿ち味が加つて来ると思ふ。

○夏休みもう三日、雲々。(今治 曉童)
作者はもう初心者の域を脱してゐて、この欄の作者ではない。永い夏休みもすでに終りを告げ登校の日が迫つて来た。一抹の不安といふだちの氣持がよく表はれてゐる。

○デパートで夏を働く女學生。(大阪 寒草)
夏休みと云のにデパートの見習ひに来て、働いてゐる女學生を見つけたのは、確かに手柄である。しかし作者の意圖の中に、夏休みと云ふ題に對して夏を働くといふ言葉の對照上の面白味を特に覺えるのならば、それは一歩狂句に踏み込んでゐるのだから、留意を要する。

○留守番を兼ねて手酌の夏休。(大阪 吼城)
かなり巧に叙してゐる。審美達者な位であつたが、つと味つて見ると、手に握つた砂が逃げてゆく様に句から受ける感じが、うさつてしまふ。これは夏休みにこんな生活があつたら一寸面白からうと道具立てを施して見た爲ではなからうと思ふ。そんな氣持で句を試みることも、あながち排斥したものでないが、それでは妙味ある句は仲々生れない。

○夏休み計畫だけは出来て居る。(同 秀太)
夏休みの嬉しさに浸つて、色々の計畫を立てゝゐるが、さて計畫通りにゆきさうにもない

あはれなる小市民(或ひは學生)の姿をやゆした心持が窺はれる。叙法も無難である。先づ前抜の部であらう。

○夏休み去年のまゝに父母在り。(同 天八)
平凡なやうであるが、眞實味をうまく捉へてゐるので、この句には迫つてくるものがある。子としての純情がよく表はれてゐる。この心持で精進されんことを望む。

○朝顔の種がみのつて休み。(同 村夫子)
着想がいい。大自然の轉廻と人事の匆忙さ、がこの句の中に織り込まれてゐる。何氣なく云つてゐるが一脈のさびしみも窺はれる。佳句に近い作だ。

○夏休み暑中見舞を書いた。(同 喜山)
秀太君の句とは反對に夏休みが済んだあとに思ひである。そして同じ様に軽いやゆを表はしてゐる。これも前抜の部だ。

○夏休みの終、俺の方が黒いぞ。(同 木石)
この句は破調である。點で第一に失敗してゐる。散文の切れつ端のやうで句としてのリズムがない。字餘り字足らずも出来るだけ控へればならぬが、破調は是非共價んで貰ひたい。着想は雅拙そのものに終つてゐる。まだこれを客觀的に叙してユーモア味を盛つたならば幾らか救はれたであらうと思ふ。

○このれは夏季日記を歸阪の途。(同 久)
この句は事實そのものを十七字にした形だ。尤も事實そのものに若干のユーモア味はあるが、大して感興を呼ぶ程のものでない。叙法の點で下五は歸阪の途中中で、日誌へいゝ加減に筆を入れてゐるとの意味に解され

ねでもないが云ひ足りない。

○夏休みすんで戀知る女學生。(大和 杏林)
前の寒草君の女學生の句は、表面から見た句であるが、この句は裏面から覗いてゐる。制服の處女が制服を脱いだ一ヶ月半に、春に目覺めたと云ふ觀點は確かに人間性のあるものが捉かんでゐる。句はすらすらと叙してゐるが、ちつとも無駄がない。

○夏休み忘れ、子を思ひ出し。(大阪 藤九郎)
これは亡くなつた子のことを云つたものであらう。休んで一日家にあると何かにつけて亡兒の夢を描夏くもろの味はひ深い想で人間味がよく流れてゐる。しかし、この句に付ても「忘れた」と思ひ出し」との言葉の取り合せの面白味に、捉はれるやうなことが萬一あるならは大いに戒心を要する。

本題と同じ題で曾て週刊朝日誌上で、路郎先生の選評になつた句を參考迄に掲記する。

(一) 夏休みの父より偉い子が戻り。(雷相)
(評) 線の太い句である。軽い皮肉もある。この句から文字に無い父の汗を見通してはならない。

(二) 夏休み母のしなびた乳房を見る。(意紫)
(評) その乳房を見て老境に入つた母をおもひ、しつかり勉強して早く母を安心させたといふ心がふと湧いたのである。夏休みらしい味のある句だ。

(三) 戀人に豫期ほど逢へぬ夏休み。(默念)
(評) 長いはずの夏休みが瞬く間に盡きて戀人の姿が雲の峰のやうに崩れてしまふ。いかにも夏休みらしい所があつて、嬉しい句である。

(次號課題) 「小説」 〆切九月十日



ペンハは叫ぶ

不朽洞主

東京句會前記

(A) 十月の十五日に 本社の句會を帝國で開くことにした。せいゝこうした機會にお出掛けが願ひたい。十五日は日曜だし、十七日は神嘗祭だし、時候は暑くなし寒くなしといふ頃だし、こんなチャンスを外すしたら全くダメですぞ。滞京中の行動は至極自由にやれる方針で、宿の如きは一人でも二人でも分宿御自由といふことにしてある。インヘク

アル・ホテルへ泊まらうと、モクチン・ホテルへ泊まらうと、彼の女のところへ走らうと親戚を騒がさうと、それも自由である。見物なんかしないで、呑みさへすればいい人もあらう。ただ何處にあるといふ聯絡だけとつて句會其の他の召集には、絶對に應じて貰ふ計劃である。絶對は一寸大げさだが、兎に角伸縮自在で、而も統制のある行動に出たい。非常時日本に必要な心がけだと思ふので、こんな時にクレンレンして於けば一石二鳥式御利益だと云へやう。これは大阪その他全國の川柳家へ申上げる言葉。

(B) お客様抜ひにしないこと、従つて御馳走の心配は御無用に願ひたい。そのリ句會の來援はウシと腰を入れること、見物はウツチャツツにおいて失敗といふ思ひ 出をつくらせること等々々、これは帝都川柳家へお頼ひの言葉。

粒々集

松山 前田 五 健
スポーツが望み 算術嫌 ひな子
招れ違ふ風 に意識の 十八九

(C) 帝都川柳大家新進、各地川柳大家新進各位が、我社の意のあるところを諒とせられ、目下續々と賛助を快諾されつゝあることを感謝する。

誹風集柳多留全集 (上)

柳翁忌を前にして 誹風柳多留全集の上巻が出た。

下手な化物見たいに、出る／＼と云つて、ちつとも出なかつただけに、ホントに出てもう飛びつくだけの感激がない。殊に江戸文化研究會とやらが、いつの間にか消えて無くなつて、一向聞いたこともない萬文社とかいふ本屋さんらしいのから、變なハガキが舞ひ込んだ。そして出来上つた本はまるつきり素人出版のこけおごしみにいな本である。

どうせ、柳多留全集などを出さうといふ人は金があり餘つて使ひ道に窮してゐる人でなければ手の出せない。事、それを江戸文化研究會がやると云ひ出したので、流石に東京だと思つて、感心もし、斯道のために感謝もし、求められるまゝに、直ちに賛助員の一人にもなつて、みんな買へ／＼とすゝめもしたものだ、それが、どこでどう間違つたものが一年待つても、トント姿を見せず、江戸文化研究會からはうんだとも潰れたとも云つて來なかつた。

ところが、萬文社とやらが、メツと姿をあらはしてはじめてくれたハガキの思ひ切つた悪文に社員某々の外には、金を支拂つてく

山水が鏡へ揺れる温泉の二階
腹當ての子の尻叩く面白さ
眉墨を引き損つた暑さです

御影 長崎 柳 秀

妻病んで庭のねぶかに臺が立ち
人の氣も知らず海山から便り
赤ん坊へそうかゝと他愛なし

四五人でする心配に酒が要り
美しい遍路姿の娘ををしみ
ガード下涼みがてらに子守役

東京 富士 野 鞍 馬

自轉車で来る中元は知れたもの
今にして思へば捨てた鑛區です
進物に一升五圓の酒賣れる

大阪 長谷川 一 徹

酒制めるなさけ見せけり人の妻
仰向けに波に浮びて二十貫
田簀橋おれがおれがが渡り居り
行きすりの胸おどらせばあらぬ眉
みやげもの大阪できをさげて來し
嘆けとて日は東西にかげりけり

れるなといふやうな
ことが書いてあつた
これを聞いたら、柄
井八右衛門さんも泉
下で顔をしかめてあ
らつしやるだろうと
思ふ。

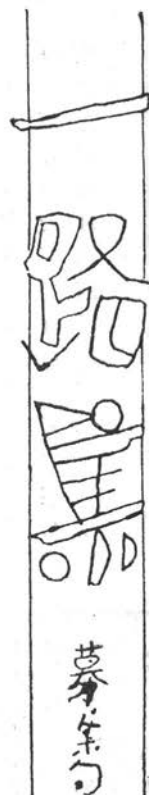
こんな、そんなで出
來上つた本がよから
う筈がない。夜店で藥
を賣るのに陸軍軍醫
總監の名を拜借する
やうに、スポーツ大臣
さまのみ名を麗々し
くお借りして權威づ
けてある。一體全體「
俳風柳多留全集」とい
ふ本は、そんなにしな
ければ賣れない本だ
ろうか。そんなにして
も賣れぬ本だと私は
考へてゐるのである
が……。

こんなものを出す
んだつたら、はじめか
ら私に相談すればも

つと賣れるものにしてあげたのに、私に相
談をしないとゝころを見るとなるべく賣れな
い本を作る考だないや流石々々江戸ッ子は
キモが太いや、ホントはそれに限ると實はよ
るこんでゐたのであるが、たしかに賣れぬ本
に間違ひはないが、セメふさぎのッッキン本
でば氣の毒で見えてゐられない。

江戸文化研究會の諺とかいふ人が昨秋十
月、豫約金をとりに見えた時にも、一寸話し
て置いたが、岡田さんが折角關係されてゐる
のだから、私なんか實は大いに期待してゐた
のだが、見本の内容を見ると、これでは賣れ
ませんぞ、しかし月末までに出るのであれば
今更そんな事を云つても追つゝ話ではな
いから、この程度でも出さへすれば有難い譯
です。なかゝの難事業ですぜ、しつかりや
つて下さいと激勵して歸つて貰つたが、失張
り難事業は難事業だつた。従つて出たものが
あんまり芳しい代物ではない。しかし見たい
人は見に來たまへ。これでは買ひ給へとも云
へぬから。

岡田さんも、夢一佛君も、この事のために
は随分苦しい思ひをされたことであらう。エ
ライものに引つかかつたものだとか私に同
情してゐる。



牛

中澤濁水選

屠殺場へ牛黙々と續くなり 青波
屠殺場で牛は名残の聲をあげ 月茶

○

野良歸り房と子供牛に乗せ 燕雀
晩鐘へ夕焼けて牛の歸り来る 磨須雄
沈む陽へつかれし牛の鳴く聲よ 十靜

○

夕立を同じ歩調で歩く牛 九文錢
酷熱もいとはぬ牛の力なる 紫陽
牛の聲眞夏の晝を睡たくす 一笑
炎天に麥わら帽の牛通り 朗人
炎天の駄牛へ白帆張つて行き 愛子

○

牧場の廣さに牛は細くゐる 祥月
牧場の朝を元氣な牛の聲 巨鯨
牛三々伍々牧場晴れてゐる 琴齋

乳しばる牛にはのく夜は白み 白扇
牛の仔の吞み足らぬま、搾らる 喜由

○

重い荷を牛無表情に曳いて來 九文錢
牛一つ聲はりあげて電車道 白峯
雑踏を二つに割つた牛の聲 月茶
のらくらの牛の親方短氣なり 太公望
牛を曳く男もあわてない姿 今雨
タクシーの前をごとく 牛車 禿山
オートバイ尻目にかけて 牛車 富美三
急ぐ奴は先へ行くと牛車 たけを
牛車カタリコトリ 黄昏れる 白扇
儲かつて歸るに遅い牛の足 明珠
きやりでも唄ひたく附く牛車 勝二
牛飼の鼻唄となるもうけだか 祥月
撒水車牛のヨダレを消す 眞晝 竹雅

川柳家戸籍調 (續)

(係) 山雨樓

(1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
(4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務
先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以
外の趣味 (10) 配偶者及子供の有無 (11) 嫌
ひなもの (12) 川柳に手を染めた年月

(338) 榎田珍竹林

(1) 榎田桂太良 (2) 珍竹林 (3) 明治三十
一年六月二十日 (4) 靜岡市 (5) 靜岡市寺
町四丁目 (6) 金物、雜貨商 (7) 俺に似よ
俺に似るなと子をおもひ 賣られたは三
味線に手の届く頃。獨り食ふ膳に母親居
てくれる (8) 程たつて寒い不貞寝の掛布
團。菊作り自分の影の父に似て (9) 碁、
將棋、觀劇、其他いろ (10) 有り。子
は男一人 (11) 鹽辛と嘘つき (12) 大正五年

(339) 後藤蝶五郎

(1) 後藤長五郎 (2) 蝶五郎 (3) 明治三十
二年四月十六日 (4) 青森縣南津輕郡淺瀬
石村 (5) 同黒石町大字市ノ町五〇 (6) 雨
傘、提灯、卸問屋 (7) 咳一つきこえぬ中
を天皇旗、劍花坊。人情はいよく紙に
薬をまぜ、久良岐。まだくたくさんあ
ります (8) 作句當時はや、自信もてます
が日がたつとだんく自信がなくなりま
す、今は一句もありません (9) 健康法か

信號へ少し急かした牛の足一笑
牛曳いて親子三人樂に生き笛秀

突然に牛物凄く蠅を追ひ
大根を積むまで牛はほとかれ
雨の橋牛いつまでか繋がる
新水

ハチ／＼の聲で器用に廻る牛小松
牛の氣に任かした^{やうに}に牛を追ひしとし

老牛の角五月雨にしめつ ぼく 勝 二
御車を曳く型で耕く八瀬の牛 琴 齋

野つ原へ牛は自由な聲で鳴き
牛の背に葉笛吹く子よ蟬が鳴く
元山 磨須雄

草に飽き牛が通せんぼうをする 葉光
つながれて牛は寝るよりよしなし 明珠

うとく／とすれば牛奴も横になり 三郎
春の日の光が遅い牛の聲 月茶

○ 牛小屋の手入に秋は餘念なく山月

牛の背も倉へ近づく米俵同
わが事のように仔牛の蠅を追ひ變人

牛を仕舞うてからの麦飯錦石
牛賣つて來た夜淋しく夕餐する 巨鯨

牛の聲、鶏の聲、鎌をとぐ曉、童
農村の疲弊も知らず牛は肥え圓太郎

○ 青春を兄貴は牛と暮してゐる巨鯨
妄想を破りし牛の聲遠く荒路

牛を繋いで空想の草に臥し紅
牛を友とし模範青訓喜由

佳句
水牛の背に鷺立てり芭蕉切る禿山

牛一つ買へぬ小作へ朝の星八歩
牛叱る度に鳥はちよつと立ち孤鶴

黄昏は牛の背中へ忍び寄り曉童
反芻の牛に五月の陽の長さ喜由

牛市場一等牛にカメラ向き
寝ころんで牛が秣を食ふ祭
葉光

黙々と働く牛にふと愧ぢる 三汀
作つても食へんのだ牛も瘦せるよ よつ葉

五 客

(一)出征の吾へ別れの牛の聲 詩郎
(二)カルメンを唄は鬪牛場の晝 新市街

(三) 牛小屋へ暑 見舞が届くなり 詩郎
(四) 御所車ひもじい牛と思はれず 新水

（留）牛の聲麥茶を井戸へ吊りる 竹雅

妻や子の貯金も牛へ引出され菊路

ら出發した銘鶏作出(10)妻あり、一男二女あります(11)女の酒のみ(12)大正六年二月頃。

(34') 河本宵果

(1)河本兵衛(2)河本宵果(3)明治三十二年十月十七日(4)岡山縣津山市總社

時計商(7)貞操に通貨の如き時代價值、井上劍花坊。理性からちらく漏れて出

る焰、井上信子(8)暴壓に潰れんとする
血の袋。どの弾が當るか無茶な機關銃。

澄田羅門

(1) 澄田清 (2) 羅門別號無シ (3) 大正三年一月十二日 (4) 島根縣簸川郡高松村字公寄下 (5) (4) 二同ジ (6) 農 (7) 晝の月

この情熱を捨てよとか(町二)明るい皮膚と暗き心に住む私(同)土工らがかへるぼ

くらはベツトにかへる(愚寵)野花包ひて
一萬人の女をさげすむ(雨迷)(8)自信の
句の無きことを樂しと思ひます(9)勞農

讀書、陸上競技、將棋音楽、映画、書道等好きになれますか鐵骨の僕にはみんなコツコツしてゐます(10)無(11)へつらひ

お世辭、返事をくれぬ男と約束を履行せぬ男、辛ひ物、賣名家(12)昭和五年より尾添雷相叔父が番傘禮賛の始めより縁兄

地位

一切を忘れて牛と畑にゐる 彌之助

天位

燈明

燈明へ宗旨の違ふ叔母が来る たけを

燈明も不氣味な風に消えてゐる 祥月

後添は輕い嫉妬の灯を献じ 紅

燈明へみぬかれまいとする心 曉童

燈明は淡し罪の夜明け初める 錦石

一心になれば燈明ゆれてくれ 孤鶴

燈明へ遅れて來たを詫びてゐる 巨鯨

佛壇の大きさに燈明揺れてゐる 九波

言葉なく燈明上げし高島田 よつ葉

燈明の灯影へ無事な子が五人 八歩

いくらかの良心はあり燈明よ 莞路

燈明へ皆んな座つて一ト七日 山月

私の心へ燈明またゝいて 翠穂

御燈明女の慾があり餘り 新市街

燈明へ寂しき風となりゆれり 青波

亡き友の寫眞にゆらぐ御燈明 泡明

燈明へ母の御詠歌はかれてゐる 遊歩

御燈明デン／＼虫が逃げてゆく 明珠

後悔の顔へ燈明の灯がうつり 元山

夕烟牛よ歸らう母が待つ よつ葉

軸吟

早乙女とかはらむとする牛の息 濁水

尼 綠之助選

幸福な二人燈明の影にゆれ 水車

燈明が眩しく映る御本山 利生

燒香を待つ間へ燈明ゆらぐなり 同

後家立てる燈明細き手内職 葉光

變屈な父に燈明淋しそう 同

燈明へ母娘淋しく膳につき 春峰

燈明の靜かに消える心かも 同

燈明の明るさにある巫女の顔 菊路

朝の宮燈明一つ消え残り 同

死水もとらず燈明だけあげる 新水

燈明の灯に死顔へ毛布着せ 同

燈明の大ききゆれて闇になり 紫陽

燈明へ疲れた兩手合すなり 同

燈明へとゞかぬ母の背の丸さ 同

佳作

燈明に思ひ出多い人生よ 章泉

拍手にゆらぐ燈明燃え下り 一杯

みあかしへ誓ふ心をみだすまじ 水車

つのる邪心へ燈明見直され 莞路

(325) 山本銀雪

(1) 山本新次郎(2) 銀雪、別號丘白士

(3) 明治三十九年十二月十一日(4) 松江市北堀町一七(5) 東京市赤坂區青山南町三ノ二一(6) 銀行員(7) いつはりを脱いで鐵骨焼け残り(國夫、浪の肩起伏に組んで押し寄せる(信子)(8) 七轉び神に楯つく臍を極め(9) 特に云ふ程のものなし(10) 妻あり子なし(11) 利口な人、馬鹿な人(12) 昭和五年夏

(326) 奥野禿山

(1) 奥野保治郎(2) 禿山(3) 明治十九年十月二十五日生(4) 神戸市相生町(5) 西成區旭北通二ノ一地(6) 使丁、遊廊事務所(7) さけとろりとろり大空の心かも、路郎師(8) 汗の玉一つ一つは辛き世や(6) 情歌作句(10) 妻一人女兒一人(11) (12) 昭和七年七月

(327) 松下小柳子

(1) 松下助雄(2) 小柳子(3) 大正三年九月三日(4) 大阪市大正區三軒家(5) 大阪市大正區三軒家西二丁目六(6) 大阪市電氣局(7) 暴力はよしキリストも殺される笑へども腰が動かぬ生活苦。まだく有ります川柳雜誌の句は大好です(8) ありません(9) 映畫なら何んでも好きです(10) ありません(11) 雨、蛇、偉そうな表情をする人(12) 昭和五年八月

燈明へ佛陀の顔のあぶらざり
燈明に母戀ひしさがせき上げる

燈明の煙の行方さみしいよ

念願のさもしき燈明明滅し

今日からを働きに出る灯を拜み

啼み切れず御燈明の灯を見つめ

燈明を上げる考母の肩の骨

書置を讀む手に燈明の灯のゆぎ

燈明にせめて女の子が欲しい

死んだとは思へぬ燈明のあかき

儲からぬまゝに燈明など上げる

燈明は坊主の影を黒く畫き

燈明を消して竹牌の白く浮き

燈明へ暖二つ三つ母の居る

燈明に歸らぬことの數多く

秀逸

勘當をした日燈明をつけてゐた

燈明へ祖母の祈りの愚痴となり

病人に燈明を催促されてゐる

何もかも燈明上げてからの母

櫛

◇

櫛につく脱毛に女淋しがり一杯

燈明のうたゝ邪心に觸れし朝竹雅
(遷後小惑)

章泉、菴二の句は平凡のやうであつて捨てが

たし、芳岸、圓太郎の坊主の影の句は暗示的

で佳句だが、今一息の憾みがある。

母と燈明の句は多かつたが、利生、紫陽の句

は他をリードして、はつきりと母の姿を描き

出して成功、圓太郎の「死んだ」とはの句は他

に類句とでは云へないが、次の一句を思ひ出

した、並べて再考ありなし

死んだと思へず宵の戸を閉める(忘作者)

菴路、一杯、紫陽の「位牌の句」新水の「書置

の」の句、圓太郎の「偈からぬ」の句は各々着

眼點に敬意を表するが、何かもの足らなきを

感ずるがどうか。

新水の「女の子が」の句はやゝ獨り合點の氣

味はあるが、深刻味に敬服、竹雅、水車、白扇

元山の句は巧みな表現である。

明珠の秀逸は、やゝ作り過ぎの憾みが、ないで

もないが、悲劇的に涙を覚える。鴉天の句は

老人の愚痴はさを表し得て、餘すところなし

葉光、美津女の句は各々びつたりとした感吟

竹雅の句は複雑な朝の祈りを表現して、社會

苦の一面を巧みに燈明と朝に結んだ秀吟と

西田 艸 樂 共 選
日 野 華 水

氣味惡ふ海邊に櫛落ちてある氷炭
落ちてゐた櫛が證據に上げられる巨鯨



▼本誌の八月號は多大なる好評をうけました。今後一層努力して皆様の期待にそひたと思ひます。何卒愛讀者諸氏の御後援をお願い致します。

▼西田艸樂

君と清水白柳子君と協力して玉造支部を新設されることになりました。幹事は清水白柳子君です。今後の活躍を祈ります。

▼中濁水君は高知支部の幹事として、多年活躍されてゐましたが、今回小松蟬風君に幹事を譲られることになりました。従つて支部の所在地が高知市朝倉町下二丁目、同君方に移りました。新幹事の活躍を祈ります。尚濁水君は従来通り社友として本社の後援と支部幹事の相談相手として盡されることになりました。

▼渡邊曉童君の幹旋で支部を新設することになりました。支部の所在地は、今治市松本通一丁目、同君方、九月五日、夜、支部創立會を催されます。今後の活躍を祈ります。

▼松江支部と八東支部とが八月十五日、練兵場(古志原)で懇親野球試合を行はれ、松江から柳人、赤陽、鼻人、菴二、都之介、祥月、八

櫛さして女の支度出來上り 琴齋
 青空へ櫛を鳴らして淋しき娘 子鬼
 櫛の齒の折れて佗しあられ散る 三郎
 櫛折れて豫感淋しく朝を出る しとし
 つげの櫛まんざらでき妻に見る 三汀
 花櫛の今日もおかしい事ばかり 欽石
 つげ櫛をある日の家女の笑_{はれる}る 曉童
 かもじ禿淋しく櫛の齒が當り 紅
 無造作な髪に無意味な櫛が乗り 天馬
 櫛もつて行水の兒を追ひ廻し たけを
 儘ならぬ心へ櫛の齒の強し 一笑
 手がうりは現場にあつた櫛一つ 菊路
 戀知るや知らず花櫛陽にそむき 新市街
 長髪へ櫛を入れぬが學者とか 利生
 すき櫛へ女兩眼つり上げて 同
 ガラスにも櫛目のうつる僕の春 十静
 よろこびの日は近づきぬ櫛の_を 同
 櫛の目をはつきり_で會ひに来る 明珠
 小遣を脊でねだつたつげの櫛 同
 さまゝの櫛に亡き娘の_の香や 水車
 美しき櫛目のつゞく戀心 同
 軸
 立膝で梳いてるとこへ御用聞 艸樂
 新聞で櫛拭いて拔毛丸める 同

▼みちのく吟社では、十五週年記念大會を八月十三日午後一時より黒石公會堂で開催されました。

▼川柳光笑會の主催で、八月十三日京阪沿線源氏ヶ瀧へ吟行致しました。出席は、かほろ、艸樂里十九、禿山、豆秋、白柳子の諸君と私が出席しましたが、川柳は一句も作らず一日楽しく暮した。

▼熊谷紅君は八月五日摩耶山へキャンブされました。「キャンピング下界は汗の灯が光り」紅

▼竹内機見女さんは 八月廿日高野山へ參詣されました。

▼横山勝二君は工事の方が忙しいので、句會に出られないので残念がつて居られますが、會社では同好者を集め、月二回、句會を催してゐられます。

▼松丘町二君は七月來の風邪がまだ全快せず毎日不快な日を送つてゐられます。一日も早く全快を祈ります。

▼中西おさむ君の嚴父が六月二十二日に永眠されました。哀悼の意を表します。

▼今治川柳會が七月廿三日鹿島徹宵句會を開かれて寄せ書送られました。曉童、十靜、宵明、素泉、春峰、双葉、紫陽、心府、小樓その他。

◇ 華 水 選

見當らぬ櫛へ抽斗みんな開け 菊 路
 色々に櫛もちかへてあわい戀 三 郎
 夜のしゝまに櫛落ちてゐる 丸 波
 貧しさへ折れた櫛で黒い髪 彌之助
 嬉しき朝へ櫛の齒がなる 曉 童
 嬌笑に櫛しら／＼と光るのみ よつ葉
 まゝ事にお河童同志梳いてゐる 葉 光
 立膝の仰山に言ひ櫛を貸し 吉左右
 櫛にまだ未練が残る 戎橋 銀波
 さし櫛のおちて更けて行く盆踊 一 杯
 華やかに櫛さして来る 許 娟 巨 鯨
 電報へ櫛テツペンの位置で来る 九文錢
 はしやいで髪を梳いてる 日曜日 變 人
 立つて櫛座つて櫛の舞臺裏 山 月
 櫛の手をフト止めて見る雨の音 白 扇
 櫛落ちかゝる 夜汽車の女子 鬼 人
 東京の女器用に櫛を持ち 柳 人
 花櫛の今日もおかしいことばかり 錦 石
 あつてなく謎の解けたる櫛の艶 水 車
 ホットして花櫛四條の橋に立ち たいけを
 横分けの櫛に鏡が曇つてゐる 祥 月
 群集を押し分けて行くつげの櫛 新 水
 櫛ことりうつろの端に陽が ぬれる 新市街

花櫛の脊を並べて抜け露路 同
 心にもない挨拶へ落ちる櫛 紅
 眞つ晝の陽へ従順な髪を梳き 同
 貧乏をなげかすかいた櫛ですき 明 珠
 折れ櫛が身に沿ふ如く長屋に 同
 梳髪はふと惡縁を見つめられ 勝 二
 駢落は櫛を落した事を言ひ 同
 黒い襟輪櫛の頃を知つてゐる 春 秋
 くろかみの素直さ櫛の齒を流れ 同
 想ひごとある日の櫛は落ちたり 八 步
 村祭乙女好みの櫛も賣り 同 雅
 沈黙の部屋に花櫛うなだれて 竹
 櫛一つ場末の朝の川は澄み 同
 石女の櫛がまばゆい夏の朝 同
 秀 逸
 稲光り櫛ハツキリと落ちた音 白 扇
 戸が走り過ぎて櫛まで落ちた朝 新 水
 選 後 感
 題が少し古い爲 澤山古い句想がありました
 それ故全没者を多く出した事は遺憾です、句
 を見せて載いて強く感じた事は、作りばなし
 の句が多い様に思はれました、そして字の丁
 寧でない事には非常に驚かされました、今後
 の作句上下が少しでも役立つ言葉ならば幸
 甚です。

▼ABC吟社の再興一週年記念句會を七月二十日夜開かれて寄書を送られました。天痴人青波、六郎、赤陽、榮路、檳榔その他
 ▼奉天川柳會から七月廿三日帝國會館で句會を催されて、寄せ書を送られました。みつる、蝶吉、新朗、笑子、青龍刀、阿喜良、連榮、健路その他
 ▼私は八月一日朝金澤着郷里へ行き、立山登山のため一日富山、二日室堂、三日立山温泉四日郷里、五日山中温泉各一泊六日の夜行で歸阪しました。今回の旅では川柳家に一人にもお目にかゝれなかつたのは實に残念でした。
 ▼本號の編輯は山雨樓、鶴峰、丹路、機見女の諸君と私とで本社事務所で致しました。

轉 居

▼西田紳樂君(大阪市東區元伊勢町昭和園)
 ▼奥野禿山君(大阪市西區旭北通二ノ一)
 ▼山本銀雪君(松江市北堀町一七)▼岩本素人君(大阪市西淀川區海老江上四丁目三)
 ▼岩崎柳路君(熱河省後西大街二味屋旅館)▼竹田青穂君(大阪市港區八幡龜町二丁目三三ノ六)

前號の正誤

八三頁慰問金へ留守の果敢なきよ 祥月
 四四頁御渡りがむし人出の愚癖がいで 曉星
 同、枕太鼓木津できへた聲の腕 翠夢
 同、配達がまよふ大阪の夏祭 三汀

肱・枕・艸・紙

(九)

梅 本 塵 山

【八十四】

端午の職は、古くは屋外に立てたるが江戸の末期より内職とて、小さき職、毛槍、馬印等を木框に入れて、座敷の中に立る事となり、屋外に立るは、紙鯉のみとなりたり。當時は兜人形の外に、乗馬鷹・上り兜等の造り物を飾りだが、是等は今廢れて無し。昔は兜人形を飾るに、毛氈を敷きて其上に竝べたるが、近頃は雛人形の如く、棚の上に飾ることとなりたり。

【八十五】

世間にては、還暦、喜字、米轉などと稱して、高齋を慶賀する例有れども、社會に對して同等の功勞も無く、年老いて子孫の扶養を受け、徒に製糞機となりて永く現世に生存するは、實に耻づ可きこと也。故に予は還暦となりても、古稀となりても、更に賀會祝宴を開きたること無し。萬一、百歳の壽を保つとも、此思志は變へじと思ふ。昔より年老いて、鶴壽、龜齡、鶴翁、龜翁などと別號して、

鶴龜に肖からむとする者あり。人間にして千萬年の壽を保たむと祈るは、飽く事を知らぬ強欲と云ふ可し。

【八十六】

東京の小石川に、茗荷谷といふ所あり。昔は此邊に多くの茗荷畑有りしより、斯る名を生じたるならむが、明治六七年頃迄は、茗荷谷町に近き、關口水道町邊に廣き茗荷畑有りし也。亦、谷中生姜とて北豐島郡谷中本村(現今の日暮里驛舍附近)より生姜を多く産出せしが、明治三十五年頃より、田畑は悉く市街と變りて、江戸名物の一を失ひたり。

【八十七】

江戸人は江戸市を美稱して、大江戸、花の江戸といひたるが、近世、神奈川縣八王子市にては、桑樹を多く栽培する由り、桑都といひ、大分縣別府市にては、溫泉の湧出豊富なる由り、泉都といへど古書に「天子所宮曰都」とあれば、桑都も泉都も僭稱と云ふ可し。名古屋人が名古屋市は、東西兩京の中間にあればと

て、中京といふも、古書に「天子所居曰三京師」、京大也師衆也」と分れば、此れも正しき稱に非ず。

【八十八】

現今の東京の待合茶屋は、江戸時代の船宿の發達せるものなるが、昔の待合茶屋は、藝妓を聘して酒食し、且つ止宿する所にては無く、頼母子講、淨瑠璃の演習會、俳諧狂歌の會席に充て、亦は人々の會合相談する所にて、純然たる貸席なりし也。而してその座敷の多く二階にて僅かに二間か三間ありし而已。待合茶屋に藝妓を聘して、酒食する事となりしは明治十五年頃よりなる可し。昔の出合茶屋と稱するものも、貸席の一種なれど、眞面目の者は行かざりし也。

【八十九】

新聞紙の發達せざりし明治初年の頃には、新聞に廣告欄といふもの無く、偶々廣告を轉するも、僅かに餘白を填むる而已なりしが、近來新聞の種類も多くなり發行部數も著しく増加せる由り、廣告は

重要なものと成りて、新聞紙全面の二分の一乃至三分の一は、廣告にて填むるに到れり。其中には面白きもの可笑しきもの等尠からず、予は新聞を讀む毎に必ず廣告欄に目を通す也。多大の廣告料を浪費して、蕪雜なる長文を掲載し、徒に南無妙法蓮華經を唱へ、而して合掌する者あれど、此れは溝渠に黄金を棄るに等し。

【九十一】

江戸時代の女子は、髮飾に鼈甲の櫛、簪、簪、珊瑚珠の簪等、高貴なるものを挿したるが、近頃の女子等は髮飾を意を注がず、寶石入りの指輪を嵌め、孔雀の如き衣服を着けても、其髮飾を見れば、鼈甲擬した蒔繪したる護謨櫛、珊瑚珠に似せたる煉玉の簪にて、大いに興の醒むる心地する也。昔は女子の櫛簪を、掏摸の爲に奪はるゝ事屢有りしが、今はその噂絶えて無し。

【九十二】

明治十一年の頃、下谷竹町の佐竹藩の址に、漆喰細工の大佛を造り、看せ物となしたるが、來觀者甚多かりし。其れより二三年の後、淺草八幡町の八幡社の境内に、漆喰細工の女海人の裸體の高き數丈の像を造り、腰卷に擬したる紅木綿の幕を張り、それを掲げて中に入ると、

妊婦の腹内の狀にて、一ヶ月より十月までの胎兒の形狀を造り物にして看せたるも、世間の評判とならず、久しく雨露に晒されたり。明治三十年の頃、淺草公園の奥山に、木骨の富士山を造り、料金を徴して人を登らせたり。此山の形狀は富士に似ず、榮螺に似たりとて、世人の評宜しからず、二三年にして取毀たれて其趾に十二階の高塔を建て、人を登らせたれど、數年の後に到りて、一方に傾斜して危険なる由り、これを取毀たむとしたるも、數千圓の工費を要するとして、其儘になし措きたるに、幸か不幸か、大正十二年九月の大地震に遭ひ、崩壞して址無くなりし。

【九十三】

淺草駒形町に、越後屋といふ泥鰯屋あり。民衆的簡易食堂ともいふ可き店にて昔より屋號の越後屋を呼ぶ者無く、駒形の泥鰯とて、世人に其名を知られたるが現在の主人渡邊某の先祖が、此處に開業してより、一百數十年永續して、東京には稀有の店なりと云ふ。下谷埋掘（北稻荷町）にも有名な泥鰯屋ありしが、此れは明治の初年に閉店したり。亦、淺草茶屋町に、山屋といふ西洋酒食料品店あり此れも有名の後家にて、現今は合名會社となりたれども、彼の隅田川諸白を賣出

したる店にして、二百年以上永續するものなる可し。

【九十三】

絹木綿の織物類も、今は昔に變りて、種々の新製品を賣出さるゝが、予は結城紬の衣服を最好む也。明治十三四年の頃紺飛白の結城紬流行して、男も女も此れを着たり。然れども結城紬は甚高價にて日常の衣服に用ひ難ければ、銘仙のみを用ひたり。此れは安價なる上に、地質堅實なる故、常服とするに宜し。近頃の女子等が好みて着る所の、錦紗縮緬といふ織物は、現代の人情に似て頗る輕薄なり。

【九十四】

近世夏袴と稱して、紹の單袴を着用する者多けれど、江戸時代には、斯る袴は無かりし。此れは明治の中葉、辯護士にして俳人なりし、角田貨冷（通稱眞平）といふ人が、着古したる黒絹の夏羽織を、いはゆる廢物利用の爲に、袴に造らせて着たるが最初にて、其れを人々が見て眞似たる由り、後には一般に、夏袴を着用するに到りし也。亦、竹冷は常に、縹色の足袋を穿きたるが、此れを眞似る門人も有たり。

(軸) 呑んで見てはなまいた事を知り 雅幽

席題 庭 吉田水車選

裏處をほめて將棋にまけてゐる 變人

金借りに來たと知らず庭へ呼び 分銅

もの思ひ庭に向つて爪をさき 岩美

戀知らぬ如く箱庭なごいちり 雅幽

不景氣へ庭の廣さも思はされ 變人

あきらめる 心庭先に獨り 水車

(軸) 水打ちの庭の廣さへ腹がへり 紅選

席題 屋 根 熊谷紅選

屋根一つ向うも同じものを干し 水車

簾椅子にまだ暑さうな屋根が見え 雅幽

わらぶきの屋根をながめて父思ふ 岩石

赤い屋根セツトの様な型で 建ち 靜波

宿替えの屋根へあがつてすべり 鮎人

(佳) 屋根の下背伸びる夜の有難し 變人

(同) 孤獨しみる屋根を見て居る 雅幽

(同) 追はれたる雀 屋根がわばかり 變人

(軸) 低氣壓屋根の瓦をおびやかに 紅選

席題 吸取紙 元吉分銅選

吸取紙おれの心を吸ふてゐる 一 笑

立腹も不服も残る 吸取紙 白峰

缺損の數字はつきり 吸取紙 元山

吸取紙まつ黒にして 儲からず 紅變

月給日吸取紙をかへておく 變人

心中の危険も知つて 吸取紙 水車

絶交を書く 吸取紙 太くしみ 紅岩

吸取紙ゆうべのうその左文字 紅石

席題 ホクロ 松岡靜歌選

泣き黒子母は内氣な針仕事 紅變

ホクロなご氣にせず 女金をため 人

父に似てはくろのものをさびしがり 鮎美

はくろ今日易者に見せる氣になつ 一 笑

新妻ははくろを見られまいとする 元山

良いところにはくろがあると言ふ 分銅

落ちぶさ今ははくろが氣にかゝり 同

妻のほくろもさびしくなりぬ 點美

生ビール妻のほくろを賞めてゐる 岩石

連れ合ひをなくした黒子占ても 紅

えりあしのほくろ本人知らぬやう 突破坊

ヒエロ今日笑はす黒子盡いてゐる 紅選

席題 マツチ 互

一本のマツチへ世帯じみて來て 雅幽

ほかかな朝にマツチを忘れて來 岩石

一本のマツチに二人笑ひ合ひ 變人

行き先きは言はず袂にあるマツチ 水車

戎橋いきなりマツチくれるなり 同

川柳 會 (出雲)

維誌社 八月七日夜 於尼祿之助居

二年振りで臺灣から歸省された 堀西冬木立

君を圍んでの句座 兼題 山 緑之助選

征服慾をそゝりて山の高きかな 與詩雄

言ひ切れぬ瞳にはつきり山は晴れ 華村

山々がゆれ横たはりたるゆううつ 羅門

(人) 山紫に我が故郷は秀麗な 比佐緒

(地) 病窓へつきり山の色を引き 華村

(天) 山にびきりと旭を押して風刺 羅門

同 蜘蛛 田鶴緒選

白雲 往き來する蜘蛛が一匹 羅門

髪を梳く女へじつと宿の蜘蛛 華村

蜻蛉等の畫へ蜘蛛巣を張つて 緑之助

(人) 蜘蛛青空に睡りて笑ひなき日 羅門

(地) 蜘蛛の巢に蜘蛛の影を夏真晝 比佐緒

(天) 秋は早來たり蜘蛛の巢に 冬木立

席題 女 冬木立選

眞白な獨占に女の涙ありたる 羅門

あかき月女の眉根の戀ごころ 同

女いとしき戀にぶさがつた睫毛よ 同

諦めた女の手紙字がうまし 緑之助

同 眞 中 比佐緒選

不氣嫌な眞中に蠅を追へる 羅門

眞中に坐り流行妓のお酌 綠之助

(人) 眞中に座つて尻の落着かず 冬木立

(地) こころ 疲れた中に寝る 羅門

(天) なし 獨占の眞中に自己を見し 同

同 潑刺たる風景 羅門

海だ夏だ一直線に明けて行く 冬木立

大漁に今夜は呑める 顔顔 綠之助

僕と彼女の青春爆笑とはなりぬ 同

川柳 會 (高知)

維誌社 七月二十一日夜

於ブラッフル涼亭 中澤濁水報

蟬の聲やんで眞晝の陽が赤い 兼 子選

ふとあきびみせた眞晝の交番所 珍風

(佳) 赤とんぼ眞晝の空を斜にとび 蟬風

(同) 電線がだるビルヤングの眞晝 青果

(軸) 兵舎もうひびり閑とした午睡 青果

席題 廻る 濁水選

高の輪へ掛をやすめた好奇心 青果

八日拾壹日　於内藤製作所　須崎豆秋報
席題　本棚、肉體美、非常線、垣
水臭い、敏感　互選

夕焼けてアトリエを出る肉體美
生け垣について廻つた佗住居
水臭い事をするなと突き返し
海岸の風にふかれる肉體美
非常線しやべりすぎて叱られる
鐵條網張つてピアノなど鳴らし
惠まれぬ男本棚と日が長し
水臭いなぞ、氣嫌のよい日なり
本一つめかれたまんま夏の晝
垣までを泣いてごまつ月明り
非常線あんなところで鳴くかへる
草を這つて露が二つに割れてけり
アトリエの裸婦にほのかに蒼い宵

同業平
同同
同同

川柳加茂川句會（京都）
雜誌社
八月十日
席題　異性
橋本迷兆選

異性ならこそ同情するのです可仙
サンルーム異性の肌の白い事治一郎
異性とは春尙あさき金釧竹雅
濡れて歸るに異性の傘同
うしろで異性が笑つて居る鏡清堂
一線も劃し異性が笑つてる同
（軸）君は女泣いてくれたることもがな

下宿屋響かせて來て金を借し豊次
戸置いた響寄宿舍更けて居る啓秀
タタミの響寄と思ふに花田

席題　響
矢島清月選

(佳)ハンマーの響希望の力痛
 (同)校堂へ響く恩師のうるむ聲
 (同)ガラス戸に遠く響く勇ましく
 (同)空瓶の響鮮人ひく車
 (同)夜の響あれは何時の汽車でも
 席題 響 中村可仙選

一方の響が止るGO, STOP
 鞭振れば若さが響く丘の上
 みづびいた小石綿帯へ響くなり
 ミットが響いた三振をして居る
 花火響いて来る部屋に二人居る
 打てばグリンと響くのはほし日だ
 わが主義を言ひ切る聲がとひき
 かけ落ちの東京といふ響き
 皇砲禮活へ下駄がすべりそう
 夜に入りて橋の響も秋のもの
 (佳)慣れてありや響のながの聲
 兼題 行 商 朝田新水選

行商が夫婦けんかの仲に居る
 實聲の天秤棒へ北時雨
 行商の泊つた村の盆踊り
 空車行商の荷を積んでやり
 行商へ奥に主人のきつてあり
 行商の何軒目かに用があり
 行商へこの夕飯早すぎる
 行商の仰向く鼻へ雨一つ
 此の家も買つてくれない戸の重さ
 行商の荷は背な一べいの重さなり
 行商の荷は背な一べいの重さなり
 行商の第六感が動いたり
 十銭の洋食で好い商人

水のある場所を行商知つてゐる
 行商人明日の天氣を言ひあてて
 (佳)此の村の不作行商聞かされる
 (同)たのまれた流行行商持て来る
 (同)表情もなく行商の疲れ切り
 席題 夏ゆく(雑吟) 清記 互選

(七)戀ともならず濱は夏ゆく
 (六)夏はゆく蚊の聲を残して夏はゆく
 (同)夏はゆく蚊の聲を残して夏はゆく
 (五)夜の土の冷たさ夏も行きたい
 (四)水平の風もヨットと別れよう
 (同)髪洗ふ病後の頬へ秋立つ日
 (参)兄弟が墓地を歩いて夏がゆく
 (同)もう歸る便り避暑地の秋近し
 (同)謎一つ嘘ともつれて逝く夏
 (同)テント村らしい棒杭だけ残り
 (同)夜の風も線香花火も夏はゆく
 (同)米櫃をからつぽにして夏はゆく
 (二)空高くなりて野邊の風
 (同)朝夕の風も夏ゆく肌に来る
 (同)芋の露コロコロ落し夏はゆく

川柳 螢ヶ池句會(大版)
 兼題 行 商 石森靜太報

八月十日夕
 夏の暑い陽盛にもやうやく馴れて。蟬が啼
 き、早蟲の聲さへあり、朝夕の涼しさを身に
 感じたる山の一夕を私達だけで納涼句會を開
 催いたしました。有志より素晴らしい賞品を
 寄贈あり、集ふ者拾七名、近來にない盛會で
 熱心に作句に耽りました。そして各選者の眞
 摯な批評があり七時半惜しまず散會。

(尙富夜本社機見女氏より菓子、一沫君よ
 りコールカルピスの寄贈を受けました)
 兼題 果 物 龜井愚龍選

西瓜切る母をかこんだ裸の子
 トマト割く青白き手や秋立ちぬ
 トラツクの上の西瓜ふ何處へゆく
 林檎むく指の尖りへふとさみし
 未亡人のひざへリソゴの皮が落ち
 柿たべる母は故郷の話する
 看護婦の瞳へトマト熱れてゐる
 野良歸り待つ兒に柿が美味そうだ
 (佳)果物を背負ひてよこり叔父が来る
 (秀)病人だりリソゴの光澤に見え
 兼題 日やけ 森 巷巴選

日やけた同志ビールの泡を立て
 日やけた顔へ處女の心見せ
 日やけた色へ退院 近くなり
 日やけた顔が新學期の自慢
 日やけた娘のパラソルへとんぼ
 ストロヘ見事に焼けた二人連れ
 日やけた黒さのまんま寫される
 (佳)日やけた娘へ縁談さるる
 (同)小麦色の肌も真夏の血はたきり
 (人)日本の陽に黒々と肌をやき
 (地)日やけた娘はがつちりも
 (天)八月へ處女の額がやけてゐる
 兼題 花形(スター) 岡田公平選

花形へ觀衆はんとに泣いてゐる
 ラグビーのスターへ雨は降り續き
 母となる事もスターの理想なり
 スターにあこがれて戀愛至上主義

—(59)—

創立一週 年記念 ABC 吟社句會 (島根)

二十日夜

於六郎居 六郎報

兼題 三原山

廣江天痴人選

純情を三原の山が誘ふなり

星月夜三原の山に處女を捨て

三原山にむすぶ戀とは誰が知る

だまつて／＼みはら山へゆく

三原山監視ばかりに暮れてゆく

失戀へ三原山から吹く風よ

プチアルの男女の意識に三原山

兼題 飢餓

松本六郎選

ハンストへ酔どれの陽が沈む

三日目の鯛が俺達のエネルギ

留置場飢餓がさせた罪ですわ

農民の飢餓をよそに關稅だ

飢餓線の村の娘は賣られて行く

襤アカの厚さと飢餓の同志愛

ガツシロト飢餓喰ひ止めん腕の節

兼題 育つ

遠藤檣選

育たない子供と言つた醫者でした

育つだらうか炎天に蜘蛛を振る

子の頭育つ魅力に撫でられる

育つ子にスピート合はサラー！

水鐵砲で金魚おどかす智恵がつき

兼題 動

大石赤陽選

夜の底の觸膝が這ふて出る音だ

動くものみな腹立たし黙したき日

月が動くか雲が行くのか野の詩境

運動を止めて妹きれいな

兼題 夢

夢迷

夢迷

夢迷

村の子に自動車の事故よろこばし

動物となつて生きんか失戀だ

兼題 死

田中都之助選

青い水が死に誘惑する断崖だ

宿帳に夫婦としるしカルモチン

打算的な情死なんかが出来るかい

手術室死線を越えたら顔が出る

白き空氣が満ちて病舎の一角

死のせまる室とは知らず子のあひ

死ぬるまで宗教嫌ひの従兄だつた

死顔を見ると言ひたき高利貸

兼題 市

山雨樓選

魚籠携げて市場へ釣れた顔を見せ

盛つてある皿へ市場の聲を張り

インフレに市場の雑魚が跳れて

土曜日のあてのない足市場抜け

子をみんない連れて市場のやゝこ

一しきり沸いて魚市空になり

(人)市場がホツタ／＼を買来る

(地)公設市場の中に背廣はモデ

(天)ほのぼの／＼中で跳れる魚市場

兼題 親切

喜

親切を無にして難を逃れて来

親切を賣物顔に廣告し

親切に持つた荷物の重すぎ給

親切をハイ／＼と聞く女給

教へ子の情に細う煙立て

親切に教へて呉れた家は留守

親切にすると母親不思議がり

兼題 山

山選

山選

山選

(人)親切に席をゆづれば拜まれる

(地)美しい群へ親切撒きに行き

(天)親切と別に借金ことわられ

兼題 靴

杏

靴音が退屈してゐる試験場

長靴の子水溜りをけつて行き

靴音に父を迎える子でしてたき

生活の靴の汚れへ花吹雪

(佳)おひらきのおと半時間靴で

兼題 長男

互

(同)スパイクに日本男子の意氣を見

(同)長谷に拍車が錆びて一昔

兼題 長男

互

いざとなつて長男渡満やめ

責任をハッキリと知る父の死後

長男の節句に鯉が跳れてなり

長男は父の寫眞をつらく見る

カフエーを知つて長男らしくなり

長男の厚司が似合ふ父なき日

長男へまだ恩給の遠い父

兼題 山

山選

新妻は女結の型でビール注ぎ

たよりないビール泡もするなり

(佳)レッテルを浮きビール冷居

(同)海が見え帆が見えビール飲

兼題 夕

天選

夕刊の晴に遠足ぐつすり寝

夕刊はボント叩いて投げ込まれ

夕刊で今朝の惨死の因を知り

(軸)夕刊に子の足がくる暑い夜

兼題 山

山選

山選

兼題 電 燈

山雨樓選

電燈がついて二次會行くと決め
電燈へ背のまんま蛾は當り
拜んでる様に電氣へ針の穴
十燭光親子三人圓う食ひ
電灯を下げて師走を縫ひ急ぐ
待つてる身チト街灯に退け目なり

兼題 愛 人

山雨樓選

愛人の手前直切りもせずに 買ひ
ウイドラの柄へ愛人ひまが
口出さぬ愛人の氣をチロと讀み
愛人の クローズアップ 夢がさめ
愛人よプラトニックを捨てませう

兼題 夏 祭

山雨樓選

銀幕を見て愛人の 息づかひ
(佳) 鐵砲を上げて愛人目で別れ
(同) 打水に愛人少し後れて來
(人) 愛人へ失業の俺と云ひ切れず
(地) 大聲に愛人蜂の集を見つけ
(天) 愛人へチト黒すぎる男性美

兼題 夏 祭

山雨樓選

夏祭財布を帯に巻いて行き
夏祭太鼓の音は雨を呼び
夏祭浴衣の中へ子を捧げ
夏祭木の間にぐれに涼しい灯
天瓜粉打つて祭へ送り出し

兼題 打 水

山雨樓選

打水が済んで女中は飯となり
打水を浴びて夕顔パット咲き
打水へ自轉車強くリンを打ち
打水を自轉車大きくうけてゆき
打水を三段跳の形でよく

村夫子

杏林

九 天

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

同 坊

群集を二つに分けて撒水車
二坪の庭打水で迎へてる

(人) 打水も蟻洪水と泳ぐなり

(地) 打水を待つてた様に虫が鳴き

(天) 打水の向ひ側には靴直し

席題 風、友情 互 選

風の晩火の用心の聲を聞き

油汗ふいて自轉車向ひ風

友情を越へずニア人同じ室

圖に乗つて來る友情に酔がしめ

逆境にたつて友情はつきりし

畔 柳 社(第十三回)

七月廿七日午後一時ヨリ

眞夏の眞晝間の會合だつたが、三味境に入つ

た我々には暑さは忘れきられてしまつたこ

の日山雨樓氏は水谷鮎美氏、高橋かほる氏を

御紹介下さつて一段の賑はしさを増した。て

御多忙中にもかかわらず 態々御出下さつて

我々を御指導下さつたことを厚く眞に感謝

に堪へない。

兼題 近 眼

山雨樓選

近眼はレゲーの色彩を見て歸り

近眼の親子三人揃つてなる

近眼をかくして見合せするなり

眼鏡とればピーチパツマの美は

はつとしたやうに近眼本をふせ

近眼はかわりない顔で聞き

(人) 無難作な銀縁がよい中學生

(地) 奥様の近眼に下女はなま来る

(天) 近眼をはづる妻のふけて見え

(軸) 校長の近眼眉は秀でたり

山雨樓

山雨樓

山雨樓

枕蚊帳横に一家は飯となり

二階借陽のある中から蚊帳を吊り

大の字が起されてある蚊帳の中

枕蚊帳希望見つめて買つて來る

枕蚊帳けつて晝寝の兒がへる

うす蚊帳を大きく上げて明日の髪

蚊帳吊ると怪談めいた部屋になり

(人) 一隅を吊つてももらへる新家庭

(地) 蚊帳を吊る女房の姿見直され

(天) 朝顔の赤が見えてる蚊帳の中

(軸) もう起きさぬ蚊帳の中で知り

兼題 二 階

兼題 二 階

朝顔の二階まで來て土用明け

二階貸しますの女房みすばらし

共稼ぎ歸つたらしい二階の灯

斜に見る二階の窓の艶かし

二階借夕刊讀みに降りて行き

(人) 寝乍らに富士招れか二階也

(地) 葉隠の二階の琴に聞きはれる

(天) 新婚を訪へは二階に通される

(軸) 二階から見てある雨の美しき

席題 社 員

兼題 社 員

失業へ外交社員ばかりあり

ライオンヤツの社員ゆうべの事を云ふ

平社員チユウインガムに社長留守

(軸) キートンに似てある社員滑稽

席題 浴 衣

兼題 浴 衣

麻雀の浴衣着てるが柄を賞め

秋になつた浴衣で淋しく居

温泉で妻と同じ浴衣着る

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

天 八

呼び出してはしい浴衣へ父の顔
夕顔へ浴衣の父と子と座り
(軸)目を云ふてゆかたを縫ひ貰ふ

席題 短氣夕立はたる 互

短氣者太つた妻をもてあまし
氣短かになつたと云ふが長生し
引き裂きキヤンパスに未練が募つて來
そふ言ふな俺の短氣は親ゆづり
扇風機短氣なおれをおだて
家を氣にして短氣出で行く
夕立に露店の人の慌てやり
夕立へ落ち付かぬ氣で軒をかり
夕立は思はぬ人に軒をかし
夕立に走れば子供嬉しがり
夕立で晩の御飯を早く喰べ
つれなきは夕立がきて向つのり
夕立に蜘蛛も一先づ網をのき
夕立を忘れた様に照つてゐる
電燈を消してはたるの數をよみ
貰ひ風呂釜は様の方へとび

艸樂居偶會

西田 艸樂報

八月十七日、艸樂新居披露を兼ね、偶會を催す、路郎先生始め綾雨、かほる、山雨樓、機見女、白柳子、友帆、夕鐘、艸樂の出席者あり兼題、席題の披露後談話に一夜愉快に過した

兼題 腕 路 郎選

戀心かほそき腕となりにけり
一家のすがる腕はきつい脂汗
男組んで男の意地はあからさま

九 天
點 美
かほる

九 天
點 美
かほる
選
氣 晴
明 坊
紫 光
喜 舟
吞 天
九 石
木 晴
天 坊
明 石
木 坊
かほる

いかに詩社例會 (松江)

七月廿參日夜 於事務所 岡崎祥月報

席題 唇

俺の心を殺したその唇だ
ほろ苦き唇となる失戀た
唇を濡らし別れのカクテルだ
間一ぱい赤い唇が來て

にぶい腕只誠實を認められ
バジヤマから毛深い腕がちらり
うかと出て巡査に腕をつかまれる
腕の中一人減るの淋しかる
(人)腕まくりして順番に水を飲み
(地)腕試しそこで見物してくれ
(天)体操が腕ばかりに見える也
(軸)腕の見せごと女房には談々
(同)腕もないのに早いのみこみ

返 事 山雨樓選

どつちつかずの返辭は悔ひはしめ
他人の食て來た返事をほめられる
まあ待てと父は返事をしてくれず
お返事のないのは承知と見なし
返事せぬ妻墨り勝なる朝を出る
その返事きつう氣になる若きにて
達者なはいが返事はして呉れる
きつちりと返事を出して淋しかり
い、返事調がお膳で待つばかり
(人)くび以來飯の返辭もなかり
(地)夕顔の咲いてるで娘の返事
(天)返事だけしといて雲をまた見
(軸)返事には米の安さが書いて

艸樂
友帆
白柳子
山雨樓
かほる
艸樂
綠雨
路郎
同

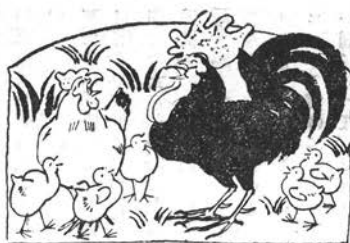
山雨樓選
路郎
艸樂
綠雨
艸樂
友帆
夕鐘
機見女
夕鐘
路郎
かほる
山雨樓

唇の紅き固性を殺してゐる
奈其井柳人選
席題 瀧

(佳)魂を忘れて瀧の音を聞き
(同)涼しさと別な心で瀧を見る
(秀)瀧の音戀のさやきほたるか
(同)瀧壺の青き二人は下駄をぬぎ
(同)キヤンペン汗を忘れた瀧の音
席題 裏切る 岡崎祥月選

(佳)裏切られ視界は冷たいな
(秀)裏切られ日なりレター焼く煙
(同)天氣豫報を信じて居る百姓だ
席題 裏切る 吾郷夢迷選
裏切つた事に彼女は氣がつかず
ゆがんだ笑ひは裏切られてる
裏切りし夜迷想に息づまる
裏切られ視界は冷たいな
同 荒路
席題 蓮 王城荒路選
(佳)故郷は水車の音に蓮が咲く
(同)蓮の葉の廣さに露が光るなり
(秀)白蓮に尼僧の足の細かりき
席題 蓮 妹尾磨須雄選
蓮の葉へ佛になつた蛙ある
白蓮に尼僧の足の細かりき
蓮の葉の廣さに露が光るなり
故郷は水車の音に蓮が咲く
同 荒路
席題 天神町 頂戴互選
寺町の暗き天神町へそれ
團體旗天神町の捨てに行こ
憂鬱を天神町に捨てに行こ
こゝからが天神町の巾となり

—(64)—



窓の輯編 路 山

の先鞭をつけた「月評」は以前のやうに評者が卓を圍んで大いに熱論を闘はしたものを提供する考へであつたが、炎暑と多忙の爲め遺憾乍ら其の運びに至らなかつた。次號では十二分にその埋め合せをするつもりだから御期待を乞ふ。

▼本號から新設した「川柳パイロット欄」は八月號で、毎切期日の誤植の爲め、原稿が切後に到着した投句があつたが次號へ廻すこととした。尙へ欄の新課題は誌上で發表するので今後は其月十日に締切ることとした。

▼本號の表紙は路郎先生の令嬢麻生リリちゃん(尋二)の切紙細工を用ふることとした。怪奇的なところがあつて面白い。昨年の九月號は麻生アト君のものだったが、リリちゃんはその妹である。

▼本社八月例會は炎暑の際とて何か變つた趣向を考へ、以前の會場ちとせ俱樂部の屋上で涼風に吹かれ乍らやる計畫だつたところが肝腎の屋上には廣告用

の輕氣球が夜の怪物のやうにうづまつてその大部分を占居してゐるので、仕方なくいつもの道頓堀俱樂部で開いた次第。

▼わが社の劃期的催し「東京旬會」も別項記載の如く月餘に迫つて來た。東都京濱川柳家の絶大なる御聲援を祈ると共にこの記念すべき會合を利用して地方からも多數上京され、文化の中樞に廻遊する好機をつかまれないことを熱望する。

▼待望されてゐた「喫茶新聞」が炎熱を征服して颯爽と出た。斬新な編輯振りと興味的な記事に満ちて誌面がピチ／＼してゐる柳壇も設けられてゐるから切に御愛讀をお勧めする。

▼八月一日公用で出張の際紀州田邊に一泊し海岸の五明樓に宿つた。その晩わざ／＼お尋ね下さつた楓林、素幾、いの丸、明荷、左馬の諸氏と夜遅く迄柳談を交へた。この旅館は大正十五年八月二十日路郎主幹が南紀行脚の際お泊りになつたところで當夜の方々は揃つて當時先生と

面接された川柳家なので一層懐かしく思はれた。(山雨樓)
▼暑中の起居を案じて下さつた方々に深謝する。一々お返事を差上げる筈が、御承知の喫茶新聞の創業で、失禮した方が澤山あつたことと思ふ。せめて殘暑見舞でもと思つてゐるが、それすら今のところ覺えない。まあ便りがなげりや、無事だと思つて容されたい。

▼しかし、お蔭で川柳雜誌の特輯號も豫想以上の好評で斷然愛讀者になるといふ讃辭をいたゞいて、さしもの暑さも忘れはてゝ編輯局は一層の努力を誓ひ合つてゐる。

▼柳壇諸報は私を主としたものが掲げられたので、毎號さうなるのと思つた方もあるやうだが、柳壇諸報は何處までも柳壇畫報で、面白い寫眞、珍らしいものであれば、ごなたの寫眞でも掲げるのに吝でない。前號でそのことは山雨樓君が書いてくれてゐたと思ふ。但し寫眞の採不採は編輯局に一任されたい。

▼廣江天痴人君のハガキの一筋に、今月の寫眞畫報は面白く拜見いたしました。表紙の寫眞は殊にうれいものでした。――うしろからソツとごなるか機見女さん。且殼の白き想ひも霞乃夫人。先生バツトが消えさうです海風。――(之れは表紙の感想です)と巧みな句による評を寄せられたのも愉快であつた。宮尾しげを君からは、口繪の主幹美人をくどき損つてゐる圖の様な氣がする。なんて、いかにも羨ましうな獨身者の悲鳴さへ受取つた。しげを君の新郎新婦ぶりを紹介するのは果していつの日か。

▼更生の生活に入つた艸樂君が自宅で句會をはじめた。私か巴御前の女性美を語つたら、それではといふので山雨樓君と謠曲「巴」をうなつて、參會者を啞然たらしめた。僕もいさゝかへキエキして、サマリだけやつてやエ、とこだけにしといつてやと一同に代つて、ヒタスラ短からんことを祈つて止まなかつた

しかしソートーのものであつたことはウキスキの味がよかつたので知れる。

▼池澤樂居氏を南海に訪ねたらゴーストツブ事件の話から、次いで次のやうな歌を示められた弱虫のわれにはゆるせ五七五五一五の勇氣なければ

の一首、私は早速、ブンアといふて夜も寝られずの口ですネと云つたら、ゲンアといふて夜も寝られずだよと云つて主客苦笑久しうした。

▼縁雨、かほる、豆秋、艸樂、白柳子の諸君等が、源氏の瀧に遊んで私をうらやましがるに私はことは海も山も知らずに過した。頻か瘦せこけるほど働いて見た。私にとつて、それは廿五回の補回戦以上の奮闘であつたことを思はれる。

▼柳路君夫妻が奉天から熱河に移つたといふ知らせがあつた。私は熱河がどんなところか知らないが二人の上に幸あれとのみ祈つてゐる。

▼奥野禿山君が、萩の茶屋でク

キンといふ喫茶室を開いた。私のうちがキンダから、クキンにしたとか聞く。この調子で行くと今にジャックも出来るだらう。

▼寺川信君が毎年の「活映」を辭して寶塚の「歌劇」の編輯に入つた。今後の「歌劇」に期待するところが出来るだらう。

柳翁忌

日時 九月六日(水)午後七時

會場 道頓堀俱樂部

(南區日本橋
南詰東入南側)

兼題 「ダム」三句 路郎選
會費 金三十錢

▼増位汀柳君が腸炎で赤十字に入院した。野球見物がたつたんださうだ。なんにしても早く癒つてほしい。東京へは必ず出かけるつもりですと病院からの頼りがあつた。

▼山本雨迷君の嚴父が重態と聞いた。何分暑さきびしいのでどうかと案じてゐる。

▼八月九日、十日、十一日の三

日間函館川柳社主催の納涼川柳趣味展覽會が森屋の五階で開催された。私も需められるまゝに短冊一二送つた。金澤では安川久流美君が三越で八月に第二回目的川柳畫展を開いた。斯うした展覽會が各地で盛んに開催されることは斯道のために慶賀に堪えない。

▼青森の「みちのく」の十五週年の祝賀も盛會だつたらしい。記念品に十和田公園の繪馬を利用されたのはいゝ思ひつきた。

▼靜岡の會へは行きたかつたが十月には擧つて東京へ行かればならぬので眼をふさいで、祝電を發するのに止めた。せめて名古屋だつたら行けたかも知れない。しかし盛會だつたさうだから何よりである。

▼東京句會の會場を借りるため廿六日の土曜の夜山雨樓君に東上して貰つた。廿七日の日曜は山雨樓君からの電話を一日待つて暮らした。なか／＼東京からの電話がない。夜遅く、御旅會から戻つたら報が来てゐた。萬事オーケーだつた。東京の秋の空を夢みながら眠つた路郎。

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樟」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清麗の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜詩原稿」さ封筒に未記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十卷第十一號課題

九月五日締切

(各題十句以内)

▼煙

▼剃刀

大島 濤 明選
生田 翠 夢 共選
廣江 天痴人 共選

第十卷第十二號課題

十月五日締切

(各題十句以内)

▼壁

▼晴衣

每號募集

前田 五 健選
高橋 かほる 選

▼近作柳樟(舊吟)

麻 生 路 郎 選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、贈讀廣告)の用件は下記川柳雜詩社事務所宛に願ひます。

定 價

一 部 金 參 拾 錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は舊曆日座内阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼諸代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指掌願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜詩に關する御用件は個人宛にしない事

昭和八年 八月廿五日印刷
昭和八年 九月 一日發行

第十卷第九號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎
發行所 川 柳 雜 詩 社
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話天下茶屋二五七九番

事 務 所 川 柳 雜 誌 社
大阪市住吉區平野西之町八三番地
電話天王寺一六七〇番

店書捌賣
(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他市内各書店)
(東京仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、實文館(函館) 石塚
(京都) 三宅 (名古屋) 弘文會 (石川縣) 小松はかりや

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなった。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいい。古本と云つても由食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は違ふの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次で公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

加茂川句會

日時 九月十日(木)午後七時
會場 仲源寺(京都四條繩手東入)
集題 「交親」三句 司郎選
會費 金 參 拾 錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方
京都支部

社告

本社の場合案内希望の方は左記へお知らせ願ひます。
大阪市住吉區旭町三ノ一四
會報係 須崎 豆秋

天王寺句會

(日時) 九月十二日午後七時
(題) 「後悔」三句
(所) 大阪天王寺區大道三丁目
内藤製作所

螢ヶ池句會

(日時) 九月十日午後一時
(題) 「夜」「心」
(所) 阪急沿線螢ヶ池刀根山
病院 幹事 石森靜太

光笑會

(日時) 九月十四日夜
(所) カナメ喫茶店
(題) 「カーテン」
(所) 大阪市南區疊屋町六
幹事 永田里十九

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち至します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴一冊 (送料共)
御申込は本社事務所宛
(錢切手代用不可)

懸賞川柳募集

題 「洗粉」 路郎選
九月十日締切
その他雑吟を募る
用紙 官製ハガキ (化粧柳壇と明記の事)
賞品 秀逸數句薄謝を呈す
投吟所 大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

懸賞喫茶柳壇

題 「果物」 夕 鐘選
九月十日締切
用紙 官製ハガキ (喫茶柳壇と明記の事)
賞品 秀逸數句薄謝を呈す
投吟所 大阪市玉出本通三の三六
喫茶新聞社

川柳手拭

二種 路郎主幹
金三拾錢 (送料共)

清 酒

白 鶴 禮 讀

白鶴をチントンシャンと提げて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百 事 意 の 如 く 白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁こはなりぬ君さ僕
白鶴に素直な父さなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



大正十三年三月三日第三號（一月一日發行）
 昭和八年八月廿五日印刷
 昭和八年九月一日發行

川柳雜誌（第一一六號）

定價金三十錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舖

いさ下用愛御に直今
 りあに店薬品粧化名有國全